學　報
Kobe　College　Bulletin

ISSN0389－164X
NO. 175
2015.12.11
神戸女学院
学報委員会

創立140周年記念礼拝　院長式辞

院　長　森　　孝一

創立者であるイライザ・タルカットとジュリア・ダッドレーがGirls' Schoolと呼んだ神戸女学院の前身は、1875年（明治８年）10月12日、神戸山本通に設立されました。西日本における最初のミッション・スクールでした。

神戸女学院は1933年（昭和８年）に、神戸から現在の西宮市岡田山にキャンパスを移転し、今日に至っています。140年の神戸女学院の歴史は、神戸時代が58年、そして岡田山時代が82年となっています。

またこの140年を別の視点から考えますと、太平洋戦争の終結までが70年、そして、戦後が70年であったことに気づかされます。この140年を振り返り、私たちはいま何を継承し、何を守り抜かねばならないのかを、共に確認したいと願っています。

タルカットとダッドレーがアメリカから日本に向かったのは、神戸女学院創設２年前の1873年のことでした。二人がアメリカを出発するときには、まだキリシタン禁制の高札が撤去されることになったことは伝わっていませんでした。迫害の可能性をも覚悟の上で、二人を日本へと押し出したものとは、いったい何であったのでしょうか。

宣教師としての来日ですから、キリスト教を日本に伝道することが第一の目的であったことは疑いありません。しかし、19世紀末から20世紀はじめにかけて、アメリカから海外伝道へと向かった多くの宣教師たちのもう一つの大きな目的は、アジア、中東、アフリカなどの社会を文明化することでした。明治維新直後に来日した宣教師たちは、日本を近代化するために、キリスト教とアメリカ文明を日本に伝えようとしたのでした。

創立者の一人タルカットは生徒たちに対して、「背筋を伸ばしなさい」と教育したと言われています。男性の後から、うつむき加減に、内股で歩くのが美徳とされていた日本女性に対して、背筋を伸ばし、視線を正面に向け、しっかりとした足取りで歩くことを求めました。

この「背筋を伸ばしなさい」という言葉の背後には、当時の宣教師たちが共通して抱いていたアメリカ文明についての理解がありました。それはアメリカ文明の根底には共和制、すなわち、民主主義を基盤とした社会体制があるのであり、共和制を支えるのは「自律した（self-governed）市民」であるという確信でした。

ヨハネによる福音書８章31、32節で、イエスさまは弟子たちに対して、次のように諭されています。「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当に私の弟子である。あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。」真理であるイエス・

キリストへの信仰により、私たちは自由を獲得する。この信仰と自由こそが、共和制と近代化を実現させるのだ。これが神戸女学院の二人の創設者をはじめ、当時、アメリカからやってきた宣教師たちに共通の信念でした。

日本の近代化のために、自由に考え、自由に議論し、自由に行動する、自主自律の女性を育成すること。これこそ、神戸女学院の初期の宣教師たちがめざしたものでした。そして、この教育目標はみごとに実現されました。神戸女学院で教育を受け、社会へと巣立っていった卒業生たちは、まさに「背筋を伸ばし」、自らの信じるところに従って、自由に羽ばたき、神さまによって備えられた自らの道を歩んでこられました。

タルカット、ダッドレーと、彼女らに続く神戸女学院の初期の宣教師たちの近代化についての思いに反して、明治政府の近代化についての考えはまったく異なったものでした。明治政府は、欧米列強によって日本が植民地化されることを防ぐために、急速な富国強兵政策を実行しました。それを実現するためには、国民を統合する必要があり、明治政府は天皇の神聖性と国家神道によってこれを進めました。

大日本帝国憲法においても、信教の自由についての条項は存在しました。第28条には、次のように定められています。「日本臣民は安寧秩序を妨げず、また臣民たるの義務に背かざる限りにおいて、信教の自由を有す。」「臣民たるの義務」とは天皇の神聖性と神道の儀式を尊重することでした。

とくに岡田山移転後の神戸女学院の先人たちは、苦しい対応を迫られました。ソール・チャペルに向かって左側の中庭には、ご真影と教育勅語を納めるための「奉安殿」が建設され、デフォレスト院長は祝日の式典において、白手袋で教育勅語を朗読しました。キリスト教主義教育と自由教育という、神戸女学院の教育の根幹を守るための苦しい対応でした。

1945年の太平洋戦争の終結によって、神戸女学院にとっての苦しく厳しい時代は終わりを迎えます。しかし、神戸女学院にとっての危機はそれが終わりではありませんでした。終戦直後に、進駐軍が神戸女学院の岡田山学舎を接収することを決定したからです。

1945年10月14日、進駐軍の大佐が神戸女学院に来院し、２、３日中に神戸女学院を進駐軍に明け渡すように命じました。まさにその朝、キリスト教主義に基づく神戸女学院が存続することの大切さを記した、アメリカの宣教団体のアメリカン・ボードからの手紙と、在米の神戸女学院支援団体である Kobe College Corporation からの電報が、当時の畠中院長のもとに届きました。畠中院長はそれを大佐に示し、それを読んだ大佐は岡田山を去り、その後、再び訪れることはありませんでした。もし、岡田山キャンパスが進駐軍に接収され、進駐軍の都合の良いように改修が加えられていたなら、昨年の重要文化財指定は決して実現しなかったと思われます。

神戸女学院の140年の歴史の後半としての「戦後70年」、神戸女学院は自由で闊達な校風のなかで、背筋を伸ばした、自律的な女性を育成するための教育を続けてきました。では、現在はどうなのか。そして、将来はどうなるのでしょうか。終戦までの70年に神戸女学院が体験した、宗教教育や礼拝が禁止されるような状況が、再び到来するとは思えません。それでは、キリスト教主義と並ぶ、神戸女学院のもう一つの教育の根幹である自由教育の今後は、どうなるのでしょうか。自律的な人格を育成するために必要な、自由な教育環境は今後も保証されていくのでしょうか。

最近の文科省の教育政策を見ますと、文科省の方針に従っている学校に対しては、補助金を優先的に交付するという傾向が見られます。もしこの傾向に萎縮してしまって、政府の教育政策について、自由に議論することを避けるようになると、神戸女学院の教育の一つの根幹である自由教育の伝統を存続させることは難しくなるでしょう。

神戸女学院の先人たちが、覚悟を決めて、守らなければならないものを守り抜いたように、私たちも神戸女学院が決して失ってはならない、それが無くなれば、神戸女学院ではなくなるような、神戸女学院教育の根幹を守り抜くための覚悟が求められています。将来、最悪の場合、補助金の全額が削減されることがあったとしても、自由教育を守り抜くのだという覚悟が、いま私たちに求められています。

創立140周年を迎えるにあたって、キリスト教主義教育と自由教育という神戸女学院の教育の根幹を継承し続けて下さった、先人たちの並々ならぬご苦労とご努力に思いをはせ、140年の歴史を通じて、つねに神戸女学院を支え導いて下さった神さまの「見えざる御手の導き」に感謝し、先人たちの覚悟を継承していく私たちのうえにも、神さまのお守りがありますようにと祈りつつ、創立140周年記念礼拝の式辞とさせていただきます。

「創立140周年記念行事」報告

神戸女学院が1875年10月に神戸山本通に創立されてから今年で140年となります。これを記念して2015年10月10日（土）に「創立140周年記念行事」が挙行されました。当日は天候にも恵まれ、約550名の方にご来場いただきました。

10時から講堂で記念礼拝が持たれました。斉藤学長による記念歌「Beauty Becomes a College」の独唱の後、森孝一院長・理事長は式辞において、140年の歴史の要所を振り返るとともに、将来に向けての決意を述べられました。

引き続き10時45分からは、卒業生で作家の玉岡かおる氏による記念講演会が行われました。講演会終了後にはサイン会も行われ、サイン待ちの方の列ができていました。

お昼を挟んで13時15分からエミリー・ブラウン記念館 めじラウンジで、レクチャー・コンサート「スクエア・ピアノで聴く明治期神戸の演奏曲」が開催されました。津上智実音楽学部教授による解説のもと、４名の音楽研究科大学院生による演奏が行われました。コンサートの模様は、翌日の神戸新聞に掲載されました。

また、13時から図書館本館と文学館で記念展示が行われ、多くの方にご参加いただきました。

- 図書館本館「神戸女学院で学んだ作家たち」
- 大学卒業論文ポスター展示
- 中高部元教諭（絵画：小川英紀先生、書：山根勇先生、写真：大川 徹先生）による展示
- 大学　写真部・美術部展示

同じく13時から開催のキャンパス・ツアーも盛況で、16名の大学生によるツアー・マイスターがご案内役を務めました。

（総務課長）

記念礼拝

創立140周年記念講演会

10時45分から飯　謙 学院チャプレンの司会により玉岡かおる氏の記念講演会「青春の神戸女学院 美しき学び舎がくれたもの」は始まりました。

まず、講堂での思い出（ご自身の入学式、保護者として参加した入学式）や北寮での生活のことなどをお話しくださいました。そして「講堂を見ても中庭を見てもあの日と同じあたたかさで迎えてくれるところが神戸女学院の素晴らしいところであり、ありがたいところ」であるとキャンパスが維持保存されていることの素晴らしさについて触れていただきました。

続いて、神戸女学院140年の歴史について、川の流れに例えて「私たちが神戸女学院という大きな大河の中でどういう時を一瞬ゆられながら過ごしたか、これを見つめることによって、未来の流れが見えてくる。」「未来の流れをつかむために神戸女学院の歴史を皆さんと一緒に紐解いてみたい」として、錦絵や写真などスライドを用いて、神戸女学院にゆかりの方々を中心に神戸山本通から岡田山へとキャンパスの変遷を交えてお話しいただきました。

最後に、卒業生が主人公となっている「銀のみち一条」（岡田美知代）、「負けんとき」（一柳満喜子）のご著書の背景についても解説いただきました。

ご多忙の中、記念の日にご講演いただきましたことに厚く御礼申し上げます。また、講堂・ホルブルック記念館併せて約550名の皆様と記念のひとときを共有できましたことに心から感謝申し上げます。

（総務課長）

KCCだより

［コーベ・カレッジ・コーポレーション（KCC）は、1920年に神戸女学院のキャンパス移転の資金援助のために設立された、アメリカ合衆国イリノイ州を本拠地とする非営利団体（NPO）です。以来、日米両国の学生生徒ならびに教員のために、さまざまな文化交流の機会を創出するなど、有形無形の力強い支援を行い、神戸女学院はその活動によって大きな恩恵を受けてきました。2004年、KCC はその活動範囲を拡大するために、名前の後に “Japan Education Exchange” という副称を付け加えて、通称 KCC-JEE となりました。今回執筆してくださったのは、ミネソタ在住で、渡米する学生・生徒をいつもご夫妻で親身にお世話くださっている石田卓三さんです。］

2015年　神戸女学院高等学部　訪米語学研修旅行
インターナショナル・サマー・プログラム

KCC-JEE 理事、
アドミニストレーション担当副会長
石田　卓三

今年2015年の夏、神戸女学院高等学部の生徒24名と引率の先生お二人が、米国ミネソタ州のウエスト・セント・ポール市にあるセント・クロイ・ルーセラン・ハイ・スクールが主催するサマー・イングリッシュ・キャンプに参加しました。このプログラムについての紹介と報告をしたいと思います。

４年前の2011年の夏に、神戸女学院高等学部の教頭先生と英語科主任の先生のお二人がミネソタに来られ、このプログラムの調査のためにセント・クロイ・ルーセラン・ハイ・スクールを訪問されました。いろんな角度から検討された結果、神戸女学院高等学部のプログラムとして採用しよう、と決まり、2013年の夏に実施されました。今回が２回目になります。

セント・クロイ・ルーセラン・スクールは、学年別に分けられた２つの学校から成る私立の学校です。６年生から８年生までのミドル・スクール、９年生から12年生までのハイ・スクールです。この２つの学校に加え、インターナショナル・ステューデンツ（International Students）という国際プログラムもあり、18ヶ国から約100名の生徒が在籍しているそうです。神戸女学院高等学部が参加したサマー・イングリッシュ・キャンプは、ハイ・スクールのプログラムの一つで、年齢が11歳から17歳の生徒が対象になっています。2015年度神戸女学院高等学部から参加された生徒は全員高等学部１年生（15～16歳）でした。

インターナショナル・サマー・プログラムの日程と概要を簡単に以下に述べます。

旅行期間：
　2015年７月12日（日）：ミネアポリス到着
　2015年８月２日（日）：ミネアポリス発
サマー・イングリッシュ・キャンプ期間：
　７月13日（月）～７月31日（金）
神戸女学院高等学部からの参加生徒数：
　24名
引率教諭：２名
日本以外の参加生徒の国：
　ブラジル、中国、韓国、ベトナム
　アメリカ人家庭でのホーム・ステイ体験：
　７月17日（金）～７月19日（日）　２泊３日

生徒の一日の活動内容

時間	授業と活動
午前 7:00～ 7:45	朝食
8:00～ 8:15	礼拝
8:15～ 9:00	英語　リーディング
9:15～10:00	英語　ライティング＆グラマー
10:15～11:00	英語　スピーキング
11:15～12:00	特別授業 （科学、数学、歴史 週ごとに変更）
午後12:00～12:30	昼食
1:00～ 4:30	バスで市内見学等＊
5:00～ 6:00	夕食
6:30～ 7:30	自習時間
7:30～ 8:30	レクリエーション
10:00	消灯

＊午後の市内見学
午前中の教室での授業のほか、午後は授業の一環として、ミネアポリス・セントポール近郊の以下の名所のバスツアーが実施されました。
ツインズプロ野球観戦、オペラ劇場舞台裏見学、モール・オブ・アメリカでの宝探し、モール・オブ・アメリカでのショッピング、ハリエット・アイランドからのミシシッピー川のボート・クルーズ、ミネソタ大学構内ツアー、サイエンス・ミュージアム、水族館、ミネハハ・フォールズ公園、ボランティア・プログラム（Feed My Starving Children）参加他。

前回の2013年は、女子寮の収容人数が十分でなかったために生徒も引率の先生も、近くのホテルに宿泊し、ホテルからバスで通学しました。今年は、学校の構内に大きな生徒の寮が新規に建てられ、完成はしていませんでしたが、生活をするには支障がない、ということで、生徒も先生も寮に入り、寮生活を楽しんだようです。引率の先生方もミネソタで数年間生活した経験があり、生徒さんにとっては生活面でも、とても心強い存在だったと思います。但し、寮の食事に関しては、日本食とはいかず、皆さん日本食が恋しくなったようです。また、寮の消灯時間が10時というのは、早過ぎて十分に勉強ができない、という不便もあったと聞きました。

第３週目の金曜日の夕方はタレント・ショーが開催され、神戸女学院高等学部の生徒と東京から個人参加された日本人生徒２名も交えて、法被姿で「ソーラン節」を披露しました。以上の内容からお分かりの通り、生徒のスケジュールは一日中詰まっており、参加する生徒は勿論、引率の先生方も多忙でしたが、有意義なプログラムだったと思います。

サマー・イングリッシュ・キャンプのプログラムそのものではありませんでしたが、上で述べました

石田さんご夫妻

ように７月17日（金）から19日（日）の週末を24名の生徒が16のアメリカ人家族のもとで２泊３日のホーム・ステイを経験しました。一家族につき２名または１名の生徒を引き受けていただきました。このホスト・ファミリーを確保することがKCC-JEEの役目でしたが、ミネソタ在住のKCC-JEEの新旧理事の方々の協力もあって、無事に役目を果たすことができました。ホスト・ファミリーを快くご承諾いただいたご家族に、改めて厚く御礼申し上げたいと思います。

ホームステイを経験した生徒の皆さんが素晴らしいホスト・ファミリーの歓迎と親切に接し、感動したことと確信します。これは、受け入れていただいたホスト・ファミリーが素晴らしい人たちであったからだけではなく、そのご家族にお世話になった生徒の皆さんの人間性も立派であったからだと思います。今後、このプログラムが継続され、2017年もミネソタで実施されるようなことがあれば、喜んで協力させていただきたい、と思っております。生徒の皆さんに、この貴重な経験を将来に活かすよう努力していただきたいと思います。

神戸女学院家庭会報告

個人情報保護のため、
一部削除しています。

春季公開講座報告

2015年度の春季の公開講座は、５月30日、６月13日、６月20日の３回、本学教員３名を講師として、「こどもとつながる」というテーマで開催いたしました。

第１回（５月30日）は、「発達障害を考える　……音楽とともに……」と題しまして、本学音楽学部音楽学科の中村健教授と、そのご子息でピアニスト・作曲家の中村徹氏に、ご講演・ご演奏いただきました。高機能自閉症との診断を受けられた徹氏が、さまざまな問題を抱えながらも、音楽に目覚めてピアニストとして、また作曲家として成長される過程を、父として支えて来られたご経験を中心に、ピアノの演奏も交えながらお話しいただきました。

第２回（６月13日）は、「『内なる子ども（インナーチャイルド)』は知っている」と題しまして、本学人間科学部心理・行動科学科の國吉知子教授にご講演頂きました。私たちの心の深奥に潜む子どもの頃の記憶や感傷である「内なる子ども」をめぐって、それが私たちの症状や生きにくさに結びついていることがあり、その「内なる子ども」の声に耳を傾けることで、人生を豊かに展開できるというということを、アニメ映画素材等も用いながら、お話しいただきました。

第３回（６月20日）は、本学文学部総合文化学科の若手教員である戸江哲理専任講師に、「子育て支援と子育てひろば――社会学の立場から」と題してご講演頂きました。幼い子どもの親たちが集まり、親どうしで話し合ったり、子どもどうしで遊ばせたりできる場である子育てひろばについて、10年間にわたって調査してこられたご経験をもとに、そのような場やそれを提供する活動について、社会学的な立場からお話しいただきました。

今回の受講者数は延べ400名近くとなり、昨年の春季、秋季を上回る多くの方に来ていただけましたことを大変うれしく思います。今後も皆様に興味を持っていただけるようなテーマで開催していきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

なお、末筆ながら、ご来場下さった皆様、ご講演下さった先生方、スタッフの皆様に感謝申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

（生涯教育委員長）

2015年度　愛校バザー会計報告

個人情報保護のため、
一部削除しています。

学院リトリート報告

暑い日が続く中、学院リトリートを７月24日（金）に行ないました。学院リトリートとは、学院全体でキリスト教主義と建学の精神について学ぶことを目的としています。なかなか落ち着いて考えることが難しい日々の中、キリスト教を軸に色々な視点から自分の職場について考えるひと時になればと願っております。

今年は、神戸女学院と関係の深い教会との歴史的なつながりについて学び、本学院の建学の精神とキリスト教の特徴を考えるひと時となりました。講師に神戸教会牧師であり本学院理事でいらっしゃる菅根信彦先生をお招きし、「神戸女学院と関係教会～その源流と働きの広がり～」と題してご講演いただきました。今年はホルブルック記念館301号教室にて行い、明治時代に神戸の地に蒔かれたキリスト教の種が、様々なかたちに実を結んでゆくさまを、神戸教会と神戸女学院の関係を軸にお話ししていただきました。分団に分かれた後はお話をふまえてお互いに意見や疑問を話し合い、とても価値のあるひと時を過ごすことができました。短い時間でしたが教職員が一同に会し、学院について共に考えるという大切なひと時をもてましたことを感謝し、新たな気持ちで職場に戻られるよう心よりお祈りいたします。

日　時　　2015年７月24日（金）　14:00～16:00
場　所　　H301教室
　　（メアリー・アンナ・ホルブルック記念館）
参加者　　96名
講　演　　菅根　信彦 氏（神戸教会牧師・本学院理事）
開会礼拝　中野　敬一
全体司会　飯　　謙
　　（チャプレン室）

2015年度　宗教強調週間

プログラム

〈11月９日～11月13日〉

11月９日（月）
早天祈祷会　文学部 総合文化学科　３年生
中高部礼拝　学院チャプレン　飯　謙
チャペルアワー　飯　謙

11月10日（火）
早天祈祷会　高等学部　３年生
中高部礼拝
「長い人生の旅路に」
桜美林大学学長　三谷　高康
チャペルアワー
「大学教育の理想」　三谷　高康
全教職員礼拝
「神から生まれ、神を知るもの」　三谷　高康

11月11日（水）
早天祈祷会　文学部 総合文化学科　２年生
中高部礼拝
「生きること、学ぶこと～ルワンダの体験から～」
NPO 法人「ルワンダの教育を考える会」代表
永遠瑠マリールイズ
チャペルアワー
「ルワンダの内戦から学んだ命の大切さ、平和と教育の大切さ」　永遠瑠マリールイズ
中高部 PTA のための宗教講話
「絶望から希望へ、ルワンダの体験から福島に生きる」　永遠瑠マリールイズ
学生寮　夕拝
「『聖マルチンの日』のおはなし」
日本基督教団神戸聖愛教会牧師　小栗　献

11月12日（木）
早天祈祷会　高等学部　３年生
中高部礼拝　「手をつないで」
メイク・ア・ウィッシュ・オブ・ジャパン事務長
大野　寿子
チャペルアワー
「共に生きる」　大野　寿子
同窓生のための宗教講話
「主　共にいます喜び」　大野　寿子

11月13日（金）
早天祈祷会　文学部 総合文化学科　４年生
中高部礼拝　音楽礼拝　KC クローバー
アッセンブリーアワー「宗教音楽の会」
J.S. バッハ　主よ、人の望みの喜びよ
リスト　２つの伝説より　他
大学院 音楽研究科　１年生

＜大学チャペルアワー＞

今年度は宗教強調週間講師として、桜美林大学学長であり、牧師としても活躍しておられる三谷高康氏。母国ルワンダにて内戦を、のちに福島で東日本大震災を経験されたことから命の尊さ、教育の大切さを訴える活動を行っている永遠瑠マリールイズ氏。難病と闘う子どもたちの夢をかなえるお手伝いをするボランティア団体でご活躍の大野寿子氏。以上の３名の先生を講師としてお迎えしました。

10日（火）は三谷高康先生が「大学教育の理想」と題してお話しくださいました。

まず桜美林学園創立者である清水安三先生の生涯と教育者としての功績を紹介されました。機会がある毎に清水先生を紹介されることを学長の使命と考えておられているとのこと。続いて、大学が高等教育機関として良き社会や良き市民を作りだすという役割を果たせているだろうか、と問題提起され、隣人のために自らを捧げていくという高い倫理性をもつ大学教育の理想について語られました。そして最後に、「自分はこの大学に育てられたのと同時に、この大学を育てた」という気概をもってほしい。そうなれば教職員もそのような学生に応えようとして、さらに真摯な応答をしようとするだろう」と学生にエールを送ってくださいました。

11日（水）は永遠瑠マリールイズ先生が「ルワンダの内戦から学んだ命の大切さ、平和と教育の大切さ」と題してお話しくださいました。青年海外協力隊として福島で洋裁研修を受け、教育の重要性を認識。帰国の２か月後に内戦勃発。３人のお子さまを抱いて難民キャンプへ逃れた際、偶然にも日本人医師の通訳を任され、再来日のきっかけを得る。しか

し東日本大震災により被災。現在は福島県でルワンダの教育の為に尽力されている歩みを伺いました。先生は、どんな困難の中にあっても生きていれば必ず神さまが守って下さると、生命の大切さ、明日への希望を持つことの大切さを語られました。

12日(木)は大野寿子先生が「共に生きる」と題してお話しくださいました。「メイク・ア・ウィッシュ」は、難病と闘う子どもの夢をかなえることを目的としたボランティア団体ですが、主婦だった大野先生はその主旨に感動して職員となり、現在は日本の事務局長を務められておられます。今回は白血病を患った12歳の少女の「『いちばん大切なもの』を絵本にしたい」という夢をかなえるべく尽力されたお話を伺いました。難病を患いながらも生み出された、「いちばん大切なもの」とは困難にあったときに力を合わせて乗り越えることのできる仲間である、という少女からのメッセージは、若い聴衆の心に響くものであったことと思います。

10日の全教職員礼拝では、三谷高康先生から現在の私立大学のおかれている現状を通し、励ましのメッセージをいただきました。また続けて永年在職者表彰式が行われ、長年ご奉仕くださった教職員の方々へ感謝のひと時を持つことができました。

期間中、毎朝8時から早天祈祷会がまもられ、若き姉妹の証を聞くことができました。共に祈るひと時を神戸女学院に連なる者で守ることができ、とても嬉しく思います。

遠方からお越しくださり、一日に何度も講演してくださった講師の先生方に深く感謝申し上げます。

(チャプレン室)

＜中高部礼拝＞

9日(月)は神戸女学院 学院チャプレンの飯 謙先生に、「『互いに愛し合う』こと」と題した奨励をしていただきました。お話を通して、世界各地で起こる難民やテロなどの社会問題を思い出しながら、「自分には何ができるか」を常に考えること、また愛神愛隣の重要性について深く考えることができました。「隣人を愛する」という精神のもとに創立された神戸女学院の素晴らしさを、多くの生徒が感じたことでしょう。

10日(火)は「長い人生の旅路に」という題で三谷高康先生にお話ししていただきました。先生は、逆境は乗り越えられるということ、人生は結果が全てではないこと、人を簡単に評価すべきではないこと、そして友のために祈ることの大切さを教えてくださいました。神戸女学院とルーツを同じくする桜美林大学の設立に関するお話を聞き、この学院で学ぶことができる恵みに、改めて気付かされました。

11日(水)には、永遠瑠マリールイズ先生にお越しいただき、ルワンダでのご自身の経験についてのお話を交えながら、内戦や難民の問題が絶えない現在の世界の状況についてお話ししていただきました。「生きていれば、学んだことがある限り明日への希望が続く」という言葉は、多くの生徒の心に残ったのではないでしょうか。当たり前の日常に感謝し、恵まれた環境で教育を受ける者として世界に貢献する必要性、使命感を強く感じました。

12日(木)に来てくださった大野寿子先生は、子どもたちの夢を叶える活動のお話を通して、夢を持つことの大切さについて話してくださいました。夢には周りの人を幸せにする力があり、夢は世界へと繋がります。私たちはそのような夢を持つことができるだけでなく、自分の夢を応援してくれる周囲の存在にも恵まれています。このことを心に留めて、毎日を過ごしていくべきだと感じました。

13日(金)はKCクローバーの皆さんによる音楽礼拝の時を持ちました。心洗われる美しい歌声に、音楽の持つ素晴らしさを感じることができました。

また早天祈祷会では、大学・高等学部の方々が、神戸女学院での経験を交えたお話をしてくださり、放課後プログラムでは様々な方面で活躍していらっしゃる先輩方の考えを聞かせていただきました。

(S宗教部　高等学部　2年生)

新任のことば

退職のことば

個人情報保護のため、一部削除しています。

史料室の窓(38)

デフォレスト先生の家

― デフォレスト家ゆかりの地 ―

神戸女学院史料室　佐伯　裕加恵

皆さんは異人館と聞いて何を連想されますか。しゃれた装飾の施された室内、外国風生活などなど。では、神戸女学院にも異人館があることはご存知でしょうか。重要文化財指定を受けたケンウッド館とエッジウット館、２つの宣教師館がそうです。宣教師館というのはキリスト教を伝道するために日本にやってきた宣教師である外国人が住んだ家のこと、ですからこれらも立派な異人館というわけです。

現在ゲストハウスになっているケンウッド館にはこんなエピソードがあります。最初の計画では、ここにはその時院長であったデフォレスト先生のために院長公舎を建てるつもりでした。しかし先生が自分のためだけに家を作るのではなく、宣教師皆のための家を望まれたので共同住宅という形になったそうです。先生のため、ということでいえば、学院創立100周年を記念して建てられた３棟の校舎の１つにデフォレスト記念館という名前がついていますが、これについても、生前先生は自分を記念した建物を建てる必要はないと語っておられたとか。

ところで皆さん、「デフォレスト館」という名前の建物がもう一つあることをご存知ですか。こちらのデフォレスト館は実際に先生が居住していた宣教師館です。仙台にある東北学院のキャンパス内にあります。神戸女学院で生涯を教育に捧げ、アメリカで亡くなられた先生の家がどうして東北に？

神戸女学院第５代院長シャーロット・バージス・デフォレスト先生は海外宣教団体アメリカンボードから日本に派遣された宣教師を父に持つ宣教師二世です。お父様のジョン・ハイド・デフォレスト博士は同志社の創立者・新島　襄氏と共に来日し、大阪で活動を始め、先生が生まれました。その後博士は新島氏と共に仙台に学校を作り（この学校はのちに廃校となりました）、そこで生涯伝道活動に従事しました。ですから先生は少女時代を仙台で過ごしました。その家が現存するのです。2013年３月には国の登録有形文化財に指定されています。

デフォレスト館は宣教師住宅としての役目を終えた後、教職員のための部屋として使われたりして老朽化しています。耐震補強と修復のために調査が必要とのことで現在は内部の見学ができない状態でしたが、神戸女学院から来たことを告げると特別に内部を見せていただけることになりました。東北学院史資料センターの日野　哲氏に詳しい説明つきでご案内いただきました。

軒の天井裏の格子

デフォレスト館は東北学院土樋キャンパスの西の端にあり、周囲は駐車場になっています。玄関は北側にあり四角形ではない複雑な形をした２階建の建物になっています。部屋のつくりはシンプルですが、ケンウッド館を彷彿とさせるものがありました。日野氏によると、デフォレスト館が建てられたのは明治20年末頃で、日本最古の木造宣教師館とのことでした。日本人によって建てられたもので、現在スレート葺になっている屋根には創建当時屋根瓦がのっていたそうです（アメリカにあるアメリカンボードの資料で最近確認されたとのことです）。光も風もよく通るこの家の一階、食堂の隣には子供部屋がありました（作り付けの箪笥の引き出しの内側に「小児室」という墨書きがあります）。先生のお部屋だったのでしょうか。軒の天井裏を見上げてみるとそこの木組みの格子は90度ではなく、斜めに組まれています。デフォレスト家のお墓のことが頭に浮かびました（お墓も仙台に在ります）。それは墓地の区画に対して正面が斜め、太平洋に面するように置かれています。デフォレスト博士の「日本とアメリカの懸け橋になりたい」という思いからこうなっていると聞いています。日野氏によると、その思いから格子模様も斜めにしているのではないかという研究者もいる、とのことでした。ご案内くださいました日野氏と、見学を快くご了承くださいました東北学院史資料センターの皆様に改めて御礼申し上げます。

＜留学報告＞

留学報告

米田　眞澄

2014年度の１年間、出身校の大阪大学に国内留学をさせていただきました。貴重な時間をいただけたことを感謝しております。国内留学中は、研究会をはじめ、学部や大学院の授業にもいくつか出させていただきました。教壇に大学院時代の同期、先輩、後輩が立っている姿をみて、当たり前ではありますが、時の経過を痛感いたしました。教員からは「やりにくいなあ」と言われながら、学生に混じって真面目にノートもとりました。

改めて学び直す機会を得られたことに深く感謝いたします。受け入れ教員となっていただいた大学院時代の先輩からは、研究室を用意できないけれどそれでもよければということでしたので、多くの時間を大学の図書館で過ごしました。図書館にこもる十分な時間が得られ、よい充電の１年間でした。

今年度から本学に復帰いたしましたが、手入れの行き届いた緑豊かなキャンパスと歴史のある美しい校舎に帰ってきたときは、改めて本学の豊かさを感じました。環境は人の成長に大きく影響しますが、本学の学生は４年間を通して穏やかで共感性豊かな女性へと成長していきます。授業での学びもさることながら、日本一美しいキャンパスが彼女たちの心の成長を支えていると改めて思いました。

今後は、この１年間の充電を学生たちの学びの発展に活かしていけるように教育・研究に精進してまいります。

（総合文化学科教授）

研究会後の茶話会にて

人　事

慶　弔

栄　誉

記念賞

個人情報保護のため、一部削除しています。

永年在職者表彰

新刊一覧

神戸女学院大学石川康宏ゼミナール　著
『21歳が見たフクシマとヒロシマ』（新日本出版社）

新刊紹介

川越栄子(共通英語教育研究センター教授)　編著

『ニュースで読む医療英語』

講談社　2014年８月刊
112頁＋CD　3,024円（税込）

久しぶりにじっくりと、医療英語を読んでみました。

近年、健康に対する関心が高まるとともに、テレビや雑誌にはさまざまな医学の話題が溢れている。その中で、The Japan Times や Voice of America のニュースで医療英語を学ぶ本書の意義は、なんであろうか。

本書で取り上げる医療トピックスは、時代のニーズに合わせて精選されている。ヒトの健康からよくある病気へ、さらに医療技術の進歩から医療制度の問題点まで、興味ある最新の医療ニュースが体系的に配列される。また最後には世界の医療の現状が据えられており、これからの日本の医療の方向性を考える上で新たな視点を提供してくれる。単に英語の教科書としてのみならず、今後の医療のあり方を考える上で重要な材料を、系統的に学べる入門書としても優れている。

一方、各トピックスの構成にも工夫が凝らされている。最初にテクニカルタームを確認し、全体を通読して内容を把握した後に、関連する英文法の解説や英作文への応用が続く。一つのトピックスを丁寧に精読することにより、幅広く、かつ深い英語の運用能力を身に付けられる。英語を学ぶ学生のみならず、仕事で英語に触れる機会の多い私にとっても、文法を確認しながら英文を読む機会は新鮮であった。

エビデンスに基づいた医療が重視される昨今、信頼性の高い情報源としては、New England Journal of Medicine と Lancet の二誌があげられる。科学的なアプローチと査読を徹底した両誌を読み解く知識と英語力を身につけることが、医療英語を学ぶ目標となろう。その目標に近づくためには、各トピックスの末尾に更に進んだ参考文献の紹介があると良かったかもしれない。しかし、まずは第一歩として、身近な医療トピックスを様々な角度から読み解く本書で、医療英語を学び始めることは有意義である。

（環境・バイオサイエンス学科教授　西田 昌司）

新刊紹介

神戸女学院大学文学部総合文化学科　監修
桐生裕子　編

『日常を拓く知５　＜旅する＞』

世界思想社　2015年８月刊
184頁　1,944円（税込）

外国暮らしが長かった上、旅行好きを自称する私は、この「旅する」と題された本を、非常に興味深く手に取らせて頂いた。旅、自己認識、成長、共同性などのコンセプトが様々な形で関わり合う対談や文章を拝読し、感銘を受け、また発見をさせて頂いた中で、私にとって興味深かった２つの発見についてお話をさせて頂こうと思う。

最初の発見は、同じ作品であっても、受け止め手の多様な専門領域の深遠な知識のフィルターを通すと、その作品を通じて見えるものや感じられるもの、作品そのものの解釈などに相当な幅ができる、ということだ。総合文化学科は専門が多岐にわたることで知られるが、宗教学、教育学、文化論、古代哲学、文学、歴史学などの異なる領域の専門知識をお持ちの先生方が、同じ作品をご覧になった場合に着眼点や理解がいかに異なるか、という点に着目してこの本をお読みいただくと、一度はご覧になられた映画や文学作品も、焦点を当てる箇所や角度を変えてみると、多様な解釈ができ一味違った発見がある、とお気付き頂けるかと思う。「自分にとって当たり前」の見解から離れ、違う角度から物を見ることで理解できることが変わる、つまり思考の中でも「旅する」ことの面白味を、この本に教わったように思う。

もう一つの発見は、旅行好きを自称しながら、あまり考えることのなかった「旅」の定義について考える糸口を与えていただいたことだ。この本にあるように「自己認識を確立した上で、自己を成長させるもの」を「旅」と呼ぶからこそ、松尾芭蕉をはじめ多くの文人が、多様な成長の機会で満ちている人生を「旅」に例えてきた歴史があるのだろう。「旅」について考えるヒントでいっぱいのこの本は、KC生のみなさんの人生の旅路に、様々な示唆を与えてくれるに違いない。

（共通英語教育研究センター専任講師　下村 冬彦）

＜オフィスの宝物＞

教職員相談室の宝物

2014年に神戸女学院岡田山キャンパスにあるヴォーリズ設計の12棟の建物が、国の重要文化財に指定されました。教職員相談室はそのうちのひとつである社交館と呼ばれる建物の１階にあります。社交館は３階建の建物ですが、建築当初は２階建で、現在の１階は地下１階でした。当時の地下１階は食堂の厨房で、昇降機を使って１階の食堂に食事を運んでいたそうです。厨房では調理師さんが、学生や教職員のため、健康や栄養バランスを考慮した献立で食事を提供してきたことと思います。この場所にいると、そのような先人の精神を感じずにはいられません。現在、食堂は新社交館に移転し、かつて厨房があった場所で、現在は教職員のこころの健康を守るための対策に取り組んでいます。

神戸女学院は設立当初、神戸ホームと呼ばれ、教職員が家庭的な雰囲気のなかで、良き伝統を受け継いできました。しかし時代がかわり、社会での人とのかかわりは、ますます難しくなってきています。相手のためを思って親身になって対応することが、ときには思わぬ結果を招くこともあります。しかし、建物の名称である社交が意味するように、いろいろな人との交わりのなかで、人として成長し、多くの学びや気づきが得られるよう、お手伝いができれば嬉しく思います。宝物であるこの地で、教職員が安心安全な職場環境のなかで、少しでも快適に働いていけるよう尽力していきたいと思います。

（教職員相談室）

社交館外観

オフィスで〈宝物〉を
～共通英語教育研究センター～

2013年４月、共通英語教育を推進する専門機関として「共通英語教育研究センター」が設置されました。オフィスは文学館１階の北東隅に位置し、間口は狭いながらも、２面に窓があり、春は図書館新館前の桜、夏はシェイクスピア・ガーデンの深緑、秋は木々の紅葉と、四季折々の美しさを居ながらにして満喫できます。

大学のなかでは一番歴史の新しい部署のため、他部署のように年輪のある「宝物」はご紹介できないのですが、ひとつ目として、最初の刊行物であるオリジナルテキスト（「A Portrait of Kobe College」）と教材「英語手帳」をあげたいと思います。新入生（英文学科以外）はオリジナルテキストをとおして、神戸女学院大学の歴史やキャンパス・ライフの様子を英語で学び、自分の大学を英語で説明できるようになります。また、「英語手帳」は英語の学習記録をつけるもので、本学独自の取り組みです。

二つ目は、今春にオフィス前に設置された「掲示板」です。当センターが共通英語科目を担う学科である以上、学生の皆さんへの情報発信は欠かせません。その原動力となるのが「掲示板」です。授業関係のお知らせの他、当センターの専任教員が企画する英語講座やイベント情報を掲示しています。そのなかには、学生の皆さんが英語をとおして輝けるような出会いがあるに違いありません。また、当センターにとって講座等に参加申し込みに来られるひとりひとりが「宝物」でもあります。オフィスの場所を知らない方もまだまだ多いかもしれませんが、オフィスからの情報発信が、学生の皆さんの「宝物」となるよう、今後もさまざまな企画を打ち出していく予定ですので、文学館１階の廊下を通られる際はぜひ目をとめていただきますようお願いします。

（共通英語教育研究センター事務室）

オリジナルテキストと英語手帳

大学報告

Prof. Dale BauerとProf. Gordon Hutnerの講演会

６月24日（水）、イリノイ大学よりデイル・バウアー教授とゴードン・ハトナー教授の夫妻が来日し、それぞれ19世紀のアメリカの大衆女性小説家と21世紀のアメリカ小説についての講演を行った。バウアー教授は、私が同大学に博士課程の学生として留学していた際に指導していただいた先生の一人であり、博士論文の審査員でもあった。非常に明るく気さくな性格の先生で、研究室で長い時間お話をしたこともあった。ハトナー先生はお会いしたことはなかったが、アメリカ文学研究ではトップジャーナルの一つである *American Literary History* の編集長を長く務め、19世紀から21世紀まで幅広い時代のアメリカ小説家について重要な業績のある研究者として有名な方である。今回初めてお会いして、その実直なお人柄や研究への情熱に触れることができた。

前の晩は京都にお泊りであったので、私がホテルまで迎えに行き、講演の前に三十三間堂に立ち寄ることができた。スナップ写真はその時に撮ったものである。夕刻からの講演には学生、先生、近隣の研究者たちが訪れ、活況を呈した。バウアー先生の講演は本学で通訳を学ぶ大学院生の力も借りた日英両言語での講演であったので、内容もよく理解されたように思う。ハトナー先生の講演は豊富な読書量に基づいていて、畳み掛けるような例証に圧倒される思いであった。なお両講演は通訳・翻訳プログラム、神戸女学院大学研究所からの助成によって実現した。謹んでお礼申し上げます。

（英文学科准教授　高村 峰生）

子どものための七夕コンサート
（子どものためのコンサート・シリーズ第42回）

「子どものための七夕コンサート：音楽のお弁当箱～輝く世界へ★レッツゴー！～」（子どものためのコンサート・シリーズ第42回）を７月４日（土）に講堂で開催しました（11時と15時の２回公演、来場者計577名）。

出演は「音楽によるアウトリーチ」履修生を中心とする音楽学部生15名（ピアノ４、声楽、フルート４、オーボエ、ヴァイオリン、ハープ、打楽器３）で管弦打が揃っているので、多様な音色やアンサンブルを聴いてほしいという願いから「音楽のお弁当箱」と副題がつけられました。

開幕はイエッセル作曲〈おもちゃの兵隊の行進〉（松尾璃奈編曲）で曲中で楽器と奏者の紹介を行い、マリンバ二重奏、ヴァイオリン独奏、ピアノ独奏、オペラ・アリアの独唱、小太鼓ソロでゲラジメッツの〈アスペンチュラス〉、ハープ伴奏によるオーボエ独奏、フルート独奏と進みました。

ここで雰囲気を変えて、会場の子どもたちと一緒に「お弁当箱のうた」で身体を使ったリズム遊びを行ない、続いて「お弁当の気持ち」という履修生が考案したリズム遊びで盛り上がりました。

フルート四重奏、武満徹〈小さな空〉の独唱、ピアノ八手連弾でラヴィニャックの〈ギャロップ・マーチ〉、全員のアンサンブルでモンティ作曲〈チャルダッシュ〉（吉田梨絵編曲）を演奏し、会場と一緒に〈たなばたさま〉を歌って締め括りました。

終演後に楽器体験コーナー（ヴァイオリン、フルート、マリンバ）と「しゃかしゃかシェイカー」の楽器工作とを行ない、行列のできる人気でした。

（音楽学部アウトリーチ・センター長　津上 智実）

オープニングの〈おもちゃの兵隊の行進〉

地域創りリーダー養成プログラム（副専攻）報告
第７回プレゼンテーション演習の発表会（2015年７月24日(金)）を終えて

本年度の受講生が、集大成披露の場につけたタイトルは『女学院１（いち）受けたい授業！仲間と作るオリジナルストーリー』。彼女たちの熱い思いが伝わってきます。

実はこの発表会、当初の予定では７月17日（金）２限に行うはずでした。聴講予定の１年生も事前に40名ほど約束していました。ところがこの日、台風の影響で全学休講になってしまいました。直前練習に励んでいただけに、彼女たちの緊張が途切れてしまわないか、私はとても心配でした。さらに、聴講予定だった１年生も、翌週は参加できなくなることがわかり、報告会を中止することも考えました。しかし彼女たち自身から、「お昼休みにすれば、友達や先生をよんでくるから、報告会をやりたい」との声があがりました。そして、呼びかけも功を奏して、24日には65名もの方々が来てくださいました。これは過去最高の人数だったと、後にスタッフから聞きました。まさに「ピンチがチャンス」が適った瞬間でした。

３年生時の地域活性化総合実習では、時間や費用、場所などさまざまな制約があり、苦労もしていました。その中で、地域の人々のために何ができるのかを仲間と必死で考えたり、困難に遭遇してとっさに判断したり、と、社会で生きていく知恵をつかんでくれたと思います。

最後になりましたが、彼女たちを指導し、励ましてくださった吉田とも子先生、人間科学部の先生方、ESD 推進室のスタッフのみなさまにお礼申し上げます。

（環境・バイオサイエンス学科准教授　三宅 志穂）

心理相談室ウィーク　講演
『性格について考える～精神分析的観点から～』

本講演では、性格について、精神分析的な考え方をもとにした理解と治療について論じた。精神科治療あるいは心理療法を行っていると、患者あるいはクライエントから、「これって性格だから治らないんですよね？」と聞かれることが時々ある。この問いは答えることが容易ではない。誰でも何らかの性格傾向を持っているものだが、それはその人らしさそのものであり、個性の一つである。したがって、「治す」ということの意味も、不眠や抑うつ気分を「治す」ということとは違ってくる。本講演ではまず、「性格の病」としてのパーソナリティ障害とはどのようなものかを概観した上で、境界性パーソナリティ障害や自己愛性パーソナリティ障害など、10種類のパーソナリティ障害の名前を挙げ、それぞれについてその特徴を述べた。その上で、パーソナリティ障害が「治る」ということがどのようなことなのか、そしてその過程はどのようになっているのかを、例を挙げながら話した。パーソナリティ障害の治療目標とは、別人のようになるということではなく、自分および他者を見る目が柔軟になることや感情が安定することであることを述べ、そのために必要な治療法について簡潔に紹介した。

（心理・行動科学科教授　吾妻 壮）

企業訪問
～学生のよりよい就職のために～

キャリアセンターでは毎年、職員が企業を訪問し、採用担当者と情報交換を行っています。この取り組みは2011年度から強化しており、今年度も引き続き注力していく取り組みの一つと考えています。例年、初夏から企業を訪問しておりましたが、今年度は、企業の採用時期が後倒しになった関係で、まさにこれから訪問活動を行う予定です。訪問対象としては、今年度学生が内定を得た企業を中心に、過去に採用実績がある企業や、ぜひ今後つながりをもちたい企業などです。

訪問を行う中で近年特に感じることは、企業側の人材ニーズがここ数年非常に高まっているという事実です。特に女子学生の採用に対する意欲の高まりを感じています。その現れとして、訪問時に求人票をいただくだけではなく、本学内で企業説明会を行いたいという依頼が多くなっています。また、ピンポイントで人材ニーズ（希望配属地や職種など）をいただき、それにマッチした学生を紹介し、実際に就職につながった事例もあります。

また、訪問した際に、過去に採用いただいた卒業生が今も大変活躍しているとの報告をいただくことがあります。キャリアセンター職員が企業訪問していて、心から嬉しく感じる瞬間です。

このような企業側の声やニーズは、実際に訪問することで初めて把握することができます。今年も企業側の来訪件数は増加傾向にありますが、こちらからの積極的なアプローチにも引き続き力を入れ、学生のよりよい就職につなげていきたいと考えています。

（キャリアセンター）

総合文化学科プロジェクト科目体験学習報告

今年９月上旬、総合文化学科の学生６名が、本学協定校のセントジョセフ大学（インド・ベンガルール）のゲストハウスに約９日間宿泊しながら、マザーテレサの活動、ストリートチルドレン保護の取り組み、貧困女性の自立支援を行う団体等の施設を訪問して、様々な社会文化的背景の人々と交流しました。以下、学生の感想を紹介します。

「一番印象に残っているのは、マイクロファイナンスをしている農村を訪れたことです。そこで出会う女性たちは明るい人たちばかりで、子どもたちが教育を受けられるように頑張っているという話などを伺い、とても輝いていました。貧しい女性ではなく、とても豊かな女性に出会えたと私は感じています。」（３年生　村上さん）

「実際にインドに行って、日本と違う文化を肌で感じられて、普段住んでいる世界が全てではないんだと実感しました。様々な施設に訪問し、自分と少し違って見える人も根本的には同じなのだと学びました。言葉がわからなくても挑戦することで、相手と通じ合えるとわかり、色々な人とコミュニケーションをとることができ、視野が広がりました。」（３年生　千葉さん）

「今回の研修は私に大きな影響を与え、これから自身が何を学びたいか考える土台となりました。人々との交流は、出会いの大切さや、幸せについて再認識させてくれました。今回得た感動を、自身の成長に活かすだけでなく、私がこれから出会う人々に伝えたいです。」（２年生　西村さん）

（総合文化学科准教授　北川 将之）

「神戸女学院の100冊」書評コンテスト

「神戸女学院の100冊」は、本学のリベラルアーツ＆サイエンス副専攻プログラム履修の補助として、19の専門領域の基本文献を５冊程度ずつ揃えた、本学独自の推薦図書である。標題のコンテストは、今夏、本副専攻プログラム学修の促進を図るため、また高大連携特別企画として、この100冊から１冊を選び書評を書くという課題で、大学生部門と高校生部門の２部門で開催された。

発表から応募締切りまでが夏休みを挟む２ヶ月余と短かったため、本学大学生部門では応募が４作と少なく残念であったが、高校生部門では、難しい課題にもかかわらず、69の応募作を得た。審査は、副専攻プログラムの分野毎に行い、その推薦をもとに最終選考を行った。その結果、両部門とも最優秀賞は該当者なし、大学生部門では佳作１作、高校生部門では優秀賞２作、佳作３作が選ばれた。表彰式は、10月24日 KCC ルームで執り行われ、入賞者には、斎藤学長より表彰状が授与され、健闘が讃えられた。

書評を書くには内容の正確な理解ばかりでなく、自分なりに批評するために、さらに他の文献を読んで考える積極的な読書が必要である。今回、それは大学生部門でも十分とは言えなかったが、入賞作は、両部門とも、内容理解と意見構築に対する真摯さにおいて秀でており、今後が期待される意欲作であった。なお、すべての応募作には、審査にあたった本学専任教員のコメントが添付され返却された。本企画にご尽力下さった教職員の皆様に記して感謝を申し上げます。

（教務部長　溝口 薫）

書評コンテスト　表彰式

Kobe College & Mozarteum Friendship Week 2015

岡田山がほんのり色づき始めた10/27-11/2、協定校のモーツァルテウム音楽大学から、ピアノ科教授 Rolf Plagge 先生とピアノ科学生 Anastasia Yasko さんが来校し、今年も Friendship Week 2015が開催されました。

期間中、マスタークラス、ピアノ重奏ワークショップ他、シマノフスキーのピアノ作品をテーマにレクチャーコンサートが開催され、ピアノ特別公開レッスンでは公募により選ばれた中高生が、音を聴くことの大切さやアーティキュレーションについて細かく熱心なレッスンを受講しました。

10/30には金曜公開プログラムとして Friendship Concert を開催。ソロ作品の他、Plagge 教授と音楽学部教員によるピアノデュオも演奏され交友を深めました。同日開催された Anastasia ピアノリサイタルでは、彼女の祖国、スクリャービンのソナタ第３番など、繊細かつ情熱的なピアニズムで同世代の学生達に強い印象を与えました。

最終日には学生交流コンサートが開催され、マスタークラスで推薦された学生のソロ演奏他、Anastasia さんと学生の共演で、フルートソナタやピアノデュオ、歌曲を披露。共に語り合い、試行錯誤して創り上げた作品を舞台で発表し、熱い感動の中で交流プログラムが終了しました。

Plagge 教授は年間４回のインターネットピアノレッスンや2015年度にスタートしたピアノ認定留学の受入れ教員として、常に大きな情熱を持って本学との交流に取り組んでくださっています。この友好関係を大切に育み、今後ますます実り豊かな交流プログラムが展開されることを願っています。

（音楽学科教授　佐々 由佳里）

Friendship Concert

日本・ASEANユースリーダーズサミットに参加して

文学部 英文学科　4年生

10月31日から11月3日までの4日間、第42回「日本・ASEAN ユースリーダーズサミット」に参加しました。内閣府等の主催のもと、ASEAN 諸国と日本からの青年、約400名以上が一同に東京に集う合宿型のプログラムです。

主な内容としては、文化交流とディスカッションの二つに分けられます。文化交流では ASEAN 各国の代表青年たちが伝統衣装を纏った美しいパフォーマンスを披露し、様々な民族が融合した東南アジアの文化に圧倒されました。その後は各国がブースを構え、自国の伝統工芸、衣装、食文化等を紹介します。ASEAN の国々を訪れた機会がなかった私にとって、ここでの文化交流は大変刺激的で、熱気と音楽に彩られた東南アジアの文化に一瞬にして魅了されました。

ディスカッションでは計10時間ほどをかけて各国の青年と意見を交わしました。今年のディスカッションテーマは “As a youth, what can you do to create an inclusive society?”。“inclusive society” という広いテーマだったため、意見を交わす際は国ごとに言葉の定義が違い、とても驚きました。しかし、英語をツールとして多くの意見を交わすことができた時間は確実に自信へと繋がり、東南アジア諸国の貧困、教育問題を知る大変貴重なきっかけとなりました。

濃い4日間で日本、そして ASEAN10カ国からの素晴らしい青年たちと出会い、友達になりました。次は彼らに会いに ASEAN に足を運ぶことが今の目標です。この縁を将来へと繋ぎ、卒業後も生涯学ぶ気持ちを大切にしたいと強く思いました。

担当国のミャンマーの学生と

第６回絵本翻訳コンクール

多くの高校生に、絵本の翻訳をとおして世界の多様な文化に興味をもってもらい、「神戸女学院大学の翻訳」の認知度を向上させたいとの意図でスタートした本コンクールも今年で6回目。今年も北海道から沖縄まで、全国337校から、熱意あふれる1667作品もの応募がありました。

今回の課題作は “The Quiet Place”（Sarah Stewart／文、David Small／絵）。1950年代のアメリカに、家族とともにメキシコから移り住んだイサベルの成長を、空き箱で手作りした The Quiet Place をとおして描く、12通の手紙で綴られたストーリーです。本学のモットー「国際理解」にあるように、コンクールでは翻訳としての質の高さはもちろん、翻訳をとおして相手の国を知り、お互いの違いを尊重し合うことが目標です。優秀賞・佳作をはじめ、言葉の違う外国に移り住んだ少女の心に共感し、理解し、日本語に移し替えることにせいいっぱい取り組んだ、素敵な作品が多数寄せられました。

今年から『もったいないばあさん』シリーズで著名な真珠まりこ氏（卒業生で絵本作家）を審査員長に迎え、本学講師の豊倉省子氏、田辺が審査にあたりました。受賞校は優秀賞が北海道札幌旭丘高校、京都府立嵯峨野高校、佳作が埼玉県立川越女子高校、京都共栄学園高校、福岡市立福岡女子高校でした。11月21日（土）、めじラウンジでの厳かな授賞式と作品発表の後、受賞者には引率の先生方・保護者とともに紅葉のキャンパスツアー、同時通訳ミニ体験などを楽しんでいただきました。

（英文学科教授　田辺 希久子）

めじラウンジでの授賞式

＜留学生紹介＞

Welcome to Kobe College

2015年度、新たに７名の留学生の方々を本学に迎えました。前期４月から７月にかけては合計３名、韓国・徳成女子大学より２名、米国・ロックフォード大学からは１名が来学されました。

後期からは、広東外語外貿大学から２名、米国・ボーリンググリーン大学からは１名の合計３名が総合文化学科に所属し日本語の講義に加え、それぞれの専攻に応じ社会学、言語、Global Studies や留学生を対象として英語で日本文化を学ぶ Introduction to Japanese Culture と日本の現代事情を学ぶ Current Issues in Japan の２科目（ともに本学学生も受講可能）などを受講しています。また、同じく後期から中国・広東外語外貿大学大学院の学生は本学大学院文学研究科で修士論文の完成を目指して学んでいます。

留学生の方々は、本学学生が留学生をサポートする“留学生バディ”制度を通じ、交流を深めています。

皆様にも、留学生たちの本学での生活・勉強がより充実したものとなるよう、様々な場面でご協力いただければ幸いです。

（学生生活支援センター・国際交流センター）

留学生歓迎会にて

＜受入れ留学生報告＞

日本への留学

徳成女子大学交換留学生

こんにちは。私は韓国の徳成女子大学からきました。神戸女学院に行くことになりドキドキした頃が昨日のことのようです。

日本に行きたいと思ったのは、私は大学で日本語を習っていて日本の国についても興味があったからです。外国語を習って、異なる文化に接しながら新しいことを学ぶのは、素晴らしいことだと思いました。

日本に来る前、20年間住み慣れた韓国を離れることが嫌だと思った瞬間もありました。日本に来ても最初の頃は門戸厄神から学校までの道も分からず大変でした。しかし、ゆかたを着て神社のお祭りを体験したり、天神祭の花火を見たり、楽しい思い出がたくさんできました。

今振り返ってみると、日本に来て新しい経験をしたことはとても良かったと思います。私が日本に来なければできないことでした。

どんなこともいいときと悪いときがあると思います。初めは「よくできるか」「上手になれるか」といったことを心配して、新しいことを始めるのが難しい時もあると思います。しかし直接経験すると、やってみてとてもよかったと思います。

神戸女学院の皆さんも、どんな心配なことがあっても、今でなければできないこと、少しでもしたいことを逃さないようにしてください。

日本に留学して、日本の文化を体験しながら、楽しい思い出を多く作ることができました。

ありがとうございました。

浴衣を着て

強く望むと

徳成女子大学交換留学生

皆さん、こんにちは。
私は韓国の徳成女子大学から来ました。
2015年の前期、神戸女学院大学で勉強しました。
高校生の時から日本の文化に興味のあった私は、大学に入って迷わず日本語を専攻しました。
しかし、１年生の時、初めて受けた日本語の授業では漢字や文法などが思ったよりとても難しくて、うまくいかず、あきらめかけていました。
そうしているうちに２年生になって自分の将来や人生のことを真剣に考えなければならない時が来たある日、大学内で交換留学があることを知り、「行きたい」と思いましたが、当時の私には準備も学力も足らず実現することができませんでした。
それでも、どうしても留学に行きたいと思い、私は、その日から日本語を頑張りはじめました。毎日学校が終わってからも日本語の塾へ行って勉強しました。
今考えると容易ではない日々でしたが、その時は日本にいる自分を想像しながら勉強をしました。
そうして１年間とにかく頑張って勉強し、今年の春に交換留学を実現することができました。
強く望み、努力することで夢が叶うのだということを私は実感しました。
ようやく来ることができた日本は、思っていた以上に先進国で何でも揃っていて、かつ皆とても親切でした。
特に、神戸女学院の国際交流センターの皆さんと学生寮の先生たちにはいつも助けていただき、感謝しています。
留学で学んだのは日本語そのものだけではなく、生活の中で触れた日本人の親切さや責任感というものがとても大きく、刺激を受けました。
私も、日本での生活で習った親切心と責任感を大切に生きようと思っています。
本当にありがとうございました。

My Life in Japan

ロックフォード大学交換留学生

First off, I'd like to say that I'm grateful to be able to study at Kobe College. Although staying in the dorm is a struggle, I'm still happy to be here. While being in Japan, I've been able to achieve some of my dreams in Japan. I have been able to go to Osaka, Kyoto, and Nara and it turns out that I love Osaka. When I visited Tokyo I was able to ride the Shinkansen. I was able to go to Akihabara, Harajuku and Shibuya. I was able to see the popular Shibuya crosswalk and the Hachiko Statue. I rode on the train in Tokyo and it was much different than the Hankyu train in Kobe. I went to the Tokyo Skytree and found a Rilakkuma store, including the Kiddyland in Harajuku. I hope to return to Tokyo to visit more places in Japan. I've been able to try different and new foods in Japan. I love the shopping in Japan, many interesting things are in Japan. Living in Nishinomiya, Kobe is a pleasant experience and I like how it's near Osaka and other interesting places. I hope to come back to Japan and to continue my Japanese language skills. Domo arigatou gozaimasu.

＜派遣留学報告＞

イースト・アングリア大学

UEAへの派遣留学報告

文学部 英文学科　３年生

2014年９月から翌年の６月まで、派遣１期生としてイギリスのイースト・アングリア大学（UEA）に留学しました。大学で通訳・翻訳プログラムを履習しているため、英語力の向上に加え、異文化を肌で感じ、外国のコモンセンスを理解できるようになることが目標でした。日本では会えない多くの人と知り合い、様々な場所に足を運んだことで、９ヶ月という短い期間でしたが、濃い時間を送ることができました。

UEA では Language and Communication Studies のコースに所属しました。翻訳学や言葉とジェンダーの関係を学び、日本語を学ぶ現地の学生と共に、日本文化について考える講義も取りました。学部をまたいで単位を取得できたので、博物館学や文化人類学、英国史の講義にも挑戦しました。どの講義も毎週リーディングの課題量が多かったのに加え、学期ごとにエッセイを１万語近く書かなければならなかったので、24時間利用ができる図書館が、私の強い味方でした。課題とエッセイには苦しみましたが、今では英語の学術書を読んだり、論文を書いたりすることへの抵抗がなくなり、卒論に向けての自信がつきました。

休日には UEA のあるノリッチを探訪したり、ロンドンまで出向いたり、ストーンヘンジ、バース、ヨーク、ニューカッスル、エジンバラなど、イギリス中を巡ることもできました。

ゆったりと流れるイギリスの時間の中でのびのびと学び、思いっきり遊び、UEA への留学は私を成長させ、将来につなげることができる経験になったと思います。

24時間利用できる図書館

ワイオミング大学

ワイオミング大学派遣留学

文学部 英文学科　３年生

ワイオミング大学はアメリカの中心部に位置し、自然豊かな広大なキャンパスには世界各国からの留学生を含め約２万人の学生が日々勉学に励んでいます。授業はネイティブの学生と肩を並べて参加しました。到着してからすぐ始まった前期授業では学習量の多さや、自分自身の語学力の無さに大変苦労しました。留学してから数か月後にやっと、周りの環境に慣れ始め、仲良くなったクラスメートとスタディグループを作り、テスト前には皆で図書館のディスカッションルームを借り、テスト対策のため分からない所を教え合い、気が付けば日付が変わっていたことも何度もありました。図書館であれだけ長時間勉強することは今後の人生でもなかなか無いのではないかと思います。当時は弱音ばかり吐いていましたが、今考えてみればいい経験だったのかもしれません。

キャンパスで学生は勉強だけではなく多くのアクティビティに参加することができます。学生達は勉強の合間に併設されている大型のジムで体を動かしたり、学内のイベントに参加したり充実した学生生活を過ごしていたのが印象的でした。私自身もハロウィンパーティーやキャンプ、学園祭などのイベントに参加しました。イベントなどは学生が主体となり、交流を目的としたものが多いため、友達作りには絶好のチャンスだと思います。

留学を検討している学生の皆さんには、勇気をだして一歩踏み出し、かけがえのない思い出を作ってほしいです。

ペイントゲームでの集合写真

ロックフォード大学

米国留学を振り返って

文学部 英文学科　4年生

私は10ヶ月間、アメリカにあるロックフォード大学（RU）で留学しました。初めての留学だったのでアメリカで生活することは簡単ではありませんでした。

私がロックフォード大学で履修したのはMicro/Macroeconomics, Marketing, Accounting, Gender Studies, and International Studiesなどちょっと難しい科目でしたがとても面白くていい勉強になりました。クラスメートと一緒に勉強をすることは本当に刺激あふれることでした。クラスで私だけが留学生ということがほとんどでしたが、現地の学生は私をいつも助けようとしてくれました。他にも私を助けてくれた心温かい多くの友達とは今でもFacebookやSnapchatで繋がっています。

留学を通して、英語能力の向上はもちろんのこと、それを使ってアメリカの文化や人間性について直に触れることができる様々な行事に参加しました。その中には私の知っているHalloweenやChristmasなどの行事ももちろんありましたが、規模の大きさが全く違いました。初めて参加する行事（EasterやThanksgivingなど）もたくさんありました。日本にいては決して味わえない貴重な体験をしたと思っています。さらに、アメリカの文化だけでなく、他の国の文化も学ぶことができました。この留学から日本やアメリカ、そして他国と少しではありますが、文化の違いを学ぶことができました。

アメリカで出会った友達や周りの人からの支えがあったからこそ、とても充実した留学生活を送ることができました。今振り返ってみても、留学するという決断は間違っていなかったと強く感じています。

RU Footballチームの応援にて

ボーリンググリーン州立大学

BGSUでの学び

音楽学部 音楽学科　4年生

私は派遣留学生として神戸女学院大学の皆様の厚いサポートの下、アメリカ、オハイオ州ボーリンググリーンにあるボーリンググリーン州立大学（BGSU）で音楽と幼児教育を学びました。BGSUは学生数2万人を超える共学の大きな大学で、快適な日本を一度も出たことがなかった私にとってアメリカでの大学生活はサバイバルのような学びの詰まった日々でした。楽しい寮生活や毎日通った学内の食べ放題ダイニング、沢山の素敵な思い出と共に文化の違いに戸惑い涙した日々も思い出されます。私のBGSUでの学びは主に声楽レッスン、オペラ、幼児音楽教育、幼児発達など希望通りのクラスを履修させていただきました。しかしその様な幸せな状況にありながら最初の数ヶ月間は、他の門下生の段違いの美しい歌声に圧倒され、またクラスでは思うように積極的になれず、なぜ私だけが英語を母語とせず肌が黄色なのかと辛く思ってしまった日々がありました。その様な時に声楽の先生が「皆と違うあなたの声、皆と違うあなた。素敵じゃない？」と私に声をかけてくださいました。その先生の笑顔と共に、皆と違うことへの不安を忘れ、皆と違うからこそ素敵だと考えるようになりました。初めて歩いた広大なキャンパスがいつしか見慣れた道になり、心一杯の不安と共に初めて降り立った空港で、帰国の日にはまた帰ってくるねと友達に手を振りました。派遣留学を終え、私は大好きな神戸女学院大学を卒業します。皆と違う私を誇りに、これからも夢に向かって精進して参ります。

昨年の私の誕生日に友達と撮った写真

＜語学研修報告＞

カリフォルニア大学アーバイン校

UC Irvine 4-Week Program

文学部 英文学科　２年生

今回のカリフォルニア大学アーバイン校夏期語学研修で私が感じたことについて述べたいと思います。以前にも語学研修に参加したことはありましたが１ヶ月間留学することは私にとって初めての経験でした。すぐにホームシックになってしまうのではないかと不安でしたが、いざ到着し UCI でのキャンパスツアーやホストファミリーとの面会を経ると、ワクワクした気持ちに変わりました。世界一フレンドリーな国アメリカと言われていることもあり、UCI の先生方や学生たちはもちろんのこと、ホストファミリー、周辺のショップの店員さん、バスの運転手さんまでもがとてもフレンドリーで留学生の片言な英語でもちゃんと聞いてくれるので、留学生にとって Irvine は最高の場所だと思います。１ヶ月という短い期間だったので、恥ずかしがらずにこちらから積極的に話しかけ、とにかく英語で会話をするように生活していました。大学までは色々なバスがあるので、どれが自分にとって一番便利なのかを見つけることも勉強になりました。様々な国からのたくさんの新しい友だちや大好きな先生方に出会うことができ、今回の UCI 語学研修に参加することができて本当に良かったです。アメリカで多くのことを感じたこの経験は私にとって貴重な宝物となりました。語学研修に行かせてくれた両親、たくさん助けてくださった先生方、そして多くの友だちに感謝です。ありがとうございました。

神戸女学院メンバーと UCI にて

ヨーク大学（カナダ）

25日間の語学研修を終えて

文学部 総合文化学科　２年生

私がこの夏語学研修で訪れたカナダは様々な国の出身の人が多く、学校の中や街中も様々な国の文化が溢れていた。学内でも各国から来たであろう学生が多くみられ、わたしの通っていたクラスにも数人アジアからの学生がいたが、彼らの英語を聞き取るのが最後まで難しかった。けれども彼らにとっては私たち日本人の英語も聞きづらかっただろうと思う。授業以外の時間はほとんどアクティビティが用意されており、トロントの名所に行くのも楽しみの一つであった。初めて訪れたナイアガラの滝は想像よりも大きく、その大きさや立派さに圧倒された。メジャーリーグ観戦では、知らなかったルールもだんだんわかるようになり、会場の一体感とともに楽しむことができた。引率のヨーク大学の方々と接する機会も多く、彼らと仲良くなれたのがこの語学研修の収穫のひとつである。寮や学内で神戸女学院のメンバーとお互い助け合いながら生活したことで、短い研修期間ながら充実した生活を送れた。学部も学科も違う、喋ったことのなかった人たちと仲良くなれたこともこの研修で得たことである。今回の研修で国内外問わず行ったことのない土地へ行きたい気持ちが芽生えた。また、英語でコミュニケーションをとるのは難しいけれど、意思の疎通ができて快く会話ができるととても嬉しく、楽しかった。この感覚を忘れず、次に生かすためにも英語の勉強や練習をこれからもしようと思う。

メジャーリーグ観戦

ケンブリッジ大学

学びの「目」を開く

文学部 総合文化学科　２年生

８月後半から９月半ばにかけてのこの研修の間、授業からも街からも、人との交流からも非常に多くのことを学ぶことができた。世界でトップレベルの大学で約１か月学習できたことはとても良い経験になり、またその土地での生活を通して以前よりも広い視野を得ることができた。街では英語だけでなく他国の言葉も聞こえ、一つの街でグローバルな交流があるということを直に感じた。ステイ先ではホストマザーや他国の学生から各国々の文化を教わり、皆で国際的な問題や時事の話題について語った。そのときいかに自分が何も知らず、何も気にかけずに普段生きているかということを思い知った。英国での生活の毎分毎秒に新たに学ぶことがあり、それは英国や他の外国についてというよりむしろ日本人や日本国を振り返るときに重要だと感じた。そして私が一番大事だと思うことは、「他者のことを考えること」である。これは日常では思いやりや、相手の意見と自分の意見を平等に見ることのできる寛容さにつながる。学問では自己を客観的に判断し、より正確な結果や情報を的確に得るための一つのカギとなる。知らないということを知り、異なるものを同じレベルで捉え、他者のことを考えることがすべてにつながると私は考える。今回の約１か月の研修を通して、英語だけでなく、他国の様子や、世界のグローバル化に対応するために自分に何が必要かということを知ることができてよかった。

ケンブリッジ大学ヒューズホールカレッジの旧館

西オーストラリア大学

西オーストラリア大学夏期語学研修で学んだこと

文学部 英文学科　２年生

私は、西オーストラリア大学で英語を学ぶと同時に、様々な国の方々と接することで文化や考え方の違いなど多くのことを学び、経験することができました。また、この研修を通して多くの人々と出会うことができ、とても有意義な１か月を過ごすことができたと感じています。

授業はそれぞれのレベル別にクラスが分けられ、自分に合ったクラスで勉強をすることができました。私のクラスは日本、イタリア、タイ、サウジアラビアなど様々な国籍の人々が集まり、日本では経験のできない環境で英語を学ぶことができました。そこで特に感じたことは、授業でのクラスメイトの積極性です。彼らは先生から当てられなくても自ら意見や質問をして積極的に授業に取り組んでいました。その姿を見て、ただ授業を受けるだけではいけないということを改めて実感すると共に、より積極的に授業に取り組もうと思いました。

ホームステイ先でホストファミリーと会話をするとき、最初の頃は自分の伝えたいことが上手く伝わらず悔しかったですが、ホストファミリーは最後まで私が何を言いたいのか理解しようとしてくれました。そのたびにもっと勉強をして英語を話せるようになりたいと強く思いました。

このように私はオーストラリアで英語を学ぶと同時に様々なことを感じ多くの人とつながることができました。ここで経験したことや感じたこと、出会いを大切にこれからも自分の目標に向かって頑張ろうと思います。

学生の活動紹介
（コンクール受賞、学会発表など）

第17回“万里の長城杯”国際音楽コンクール
ピアノ部門　大学の部　第１位・審査員特別賞
（2015年３月22日）
音楽学部 音楽学科 ４年生
（ピアノ専攻）

第17回“万里の長城杯”国際音楽コンクール
打楽器部門　大学の部　優秀賞（2015年３月22日）
音楽学部 音楽学科 ３年生
（打楽器専攻）

第18回 TIAA 全日本作曲家コンクール
室内楽部門　奨励賞（2015年４月３日）
音楽学部 音楽学科 ３年生
（ミュージック・クリエィション専攻）

第１回豊中音楽コンクール　大学・一般の部
ピアノ部門　第３位（2015年５月30日～31日）
音楽学部 音楽学科 ４年生
（ピアノ専攻）

第25回日本クラシック音楽コンクール地区本選会
ピアノ部門　大学の部　優秀賞（2015年10月７日）
音楽学部 音楽学科 １年生
（ピアノ専攻）

第16回大阪国際音楽コンクール
声楽部門［Age-U］歌曲コース
エスポアール賞（2015年10月11日）
音楽学部 音楽学科 ２年生
（声楽専攻）

第16回大阪国際音楽コンクール
声楽部門［Age-U］オペラコース
エスポアール賞（2015年10月11日）
音楽学部 音楽学科 ４年生
（声楽専攻）

2015音の夢ピアノコンクール
大学・一般部門　第１位　室内楽賞
（2015年10月18日）
音楽学部 音楽学科 １年生
（ピアノ専攻）

新国立劇場オペラ研修所第19期生
選考試験　合格（2015年10月22日）
音楽学部 音楽学科 ４年生
（声楽専攻）

第30回寛仁親王牌全国童謡歌唱コンクール
グランプリ大会　大人部門　銀賞
（2015年11月３日）
音楽学部 音楽学科 ３年生
（ミュージック・クリエィション専攻）

第17回日本演奏家コンクール東京本選
ピアノ部門　一般Ａの部　奨励賞
（2015年８月30日）
大学院 音楽研究科 １年生
（ピアノ専攻）

第17回日本演奏家コンクール本選　声楽部門
一般Ａの部　第２位　神戸市長賞
（2015年10月９日）
大学院 音楽研究科 １年生
（声楽専攻）

第21回日本環境毒性学会研究発表会にて発表。
35歳未満の若手研究者に贈られる若手奨励賞受賞。
大学院 人間科学研究科 Ｍ１
（環境科学分野）

第21回日本環境毒性学会研究発表会にて発表。
大学院 人間科学研究科 Ｍ２
（環境科学分野）

公益財団法人 勤労青少年躍進会・一般社団法人 日本勤労青少年団体協議会主催「若者を考えるつどい2015」エッセイ応募。努力賞受賞。
大学院 人間科学研究科 Ｍ１
（環境科学分野）

化学工学会第47回秋季大会にて発表。
大学院 人間科学研究科 Ｍ１
（健康科学分野）

第15回日本音楽療法学会学術大会にて発表。
大学院 人間科学研究科 研修生
（臨床心理学分野）

日本心理臨床学会第34回秋季大会にて発表。
大学院 人間科学研究科 Ｄ３
（臨床人間科学分野）

日本箱庭療法学会第29回大会にて発表。
大学院 人間科学研究科 Ｄ２
（臨床人間科学分野）

日本心理臨床学会第34回秋季大会にて発表。
大学院 人間科学研究科 修了者
（臨床心理学分野）

音楽学部夏期講習会報告

2015年音楽学部夏期講習会は、７月30日(木)～８月２日(日)の日程で開催いたしました。本学の音楽教育への取組を少しでも多くの皆さんに知っていただき、実際の指導現場を体験してくださることを目的として今年の講習会には206名が参集し、本学の多彩な授業体験や、キャンパスの雰囲気を直接感じ取っていただく機会になったことと思います。

講習会のスケジュールは、器楽専攻、声楽専攻及びミュージック・クリエィション専攻については、聴音、楽典のテスト及び授業と、各専攻教員による個人実技レッスンを実施しました。またザビエル・ラック先生（フルート）のミニコンサート（伴奏 岡田 将先生)、さらに、鬼一 薫先生（声楽）と城 沙織先生（ピアノ）のミニコンサートに耳を傾ける楽しいひと時となりました。

また舞踊専攻はリズム・ソルフェージュ授業、そして教員陣による実技レッスン指導。また島﨑 徹教授の特別講座、さらに舞踊専攻生による「ショート・パフォーマンス」が披露されました。

（音楽学部事務長）

保護者懇談会報告

今年度の保護者懇談会は３回行われました。

まず全学部１年生保護者対象の懇談会が、６月６日(土)15時から家庭会大学部会総会に引き続き、本学院講堂で開催されました。出席保護者数は約80名。学生部長の挨拶と１年生学生主事紹介の後、共通英語教育、就職状況・就職活動、学生生活全般、留学に関する説明が共通英語教育センター教員および各部署の職員によって行われました。またその後個別懇談が実施されました。

地方会場では中国地区・九州地区在住全学年保護者対象の懇談会が、６月20日(土)11時30分からホテル広島ガーデンパレスにおいて開催されました。出席保護者数は24組、31名。学生部長の開会祈祷、学生副部長の挨拶、学長の学事現況報告、学生部長の講和、キャリアセンター課長の最近の就職状況説明が行われました。昼食（懇談）をはさんで、午後から個別懇談が実施されました。

また、北陸地区在住全学年保護者対象の懇談会が７月18日(土)11時30分から福井フェニックスホテルで開催される予定（出席予定保護者数14組、20名）でしたが、生憎の台風により中止となりました。

全学部２年生保護者対象の懇談会は、10月17日(土)13時から本学エミリー・ブラウン記念館で開催されました。出席保護者数は66組、77名。学生部長の開会祈祷と挨拶、および学事現況報告の後、カウンセリングルーム専任カウンセラーの講演が行われました。その後個別懇談が各学科、各部署に別れて実施されました。

いずれの会も和やかな雰囲気のうちに無事に終了いたしました。今年度ご協力を賜った関係各位、保護者の皆様に、厚く御礼申し上げます。

（学生生活支援センター課長）

夏期インターンシップ実施報告

インターンシップは、学生にとって、実際の仕事や職場の状況を知り、自己の職業適性や職業生活設計など職業選択について深く考える契機となります。本学では、多くの企業や自治体・事業体のご協力を得て、キャリアセンターが学生に就業体験を行う機会を提供しています。

ひと口にインターンシッププログラムと言っても、営業同行のような形で実際に就業体験をするプログラムから、グループワークなどを通じ課題に取り組み、プレゼンテーションを行うプログラムなど、多種多様なプログラムがあります。学生は、自分の希望業界や体験したいプログラムに応じて、各種のインターンシップに参加します。

この夏のインターンシップでは、以下の企業、自治体、団体の皆様のお世話になりました。記して、心よりの感謝の意を表します（かっこ内は受け入れてくださった本学学生数）。

兵庫県庁（４名）、西宮市役所（２名）、香川県庁（１名）、兵庫県経営者協会／尼神運輸（１名）、兵庫県経営者協会／ブレックス（１名）、兵庫県経営者協会／カナリア（１名）、兵庫県経営者協会／ ANA クラウンプラザホテル神戸（１名）、兵庫県経営者協会／兵庫県雇用開発協会（１名）、姫路経営者協会／姫路信用金庫（１名）、姫路経営者協会／アークハリマ（１名）、和歌山県経営者協会／本州化学工業（１名）、和歌山県経営者協会／テレビ和歌山（１名）、堺・南大阪地域インターンシップ推進協議会／紀陽銀行（１名）、山口県インターンシップ推進協議会／山口朝日放送（１名）、関西環境管理技術センター（１名）、三菱 UFJリサーチ＆コンサルティング（１名）、野村證券（２名）、三井住友海上火災保険（４名）、大阪シティ信用金庫（１名）、尼崎信用金庫（２名）、姫路信用金庫（１名）、JTB 西日本（１名）、名鉄観光サービス（１名）、日本旅行（２名）、阪急交通社（１名）、ウエスティンホテル大阪（１名）、ホテルオークラ神戸（３名）、協和発酵バイオ（１名）、島津テクノリサーチ（１名）、カース・キャリアセンター（２名）、浜松商工会議所（１名）

KCC/KC インターンシッププログラム／ Japan America Society of Chicago（１名）、Anderson Japanese Gardens（１名）、The Sketchy Artist（１名）

学生のインターンシップに対する関心は高く、５月と６月に各１回行われたインターンシップ・ガイダンスでは、合わせて550名を超える参加がありました。また、アメリカに学生を派遣する KCC/KC インターンシップの説明会、および派遣学生による報告会にも、合わせて30名程度の学生が集まりました。

こうした熱心な要望に応え、今後とも、学生の精力的な活動を励まし続けたいと考えています。

（キャリアセンター）

＜インターンシップ参加報告＞

KCC/KCインターンシップ

文学部 英文学科　３年生

私は８月から９月までの約１ヶ月間インターンシップに参加させていただき、イリノイ州シカゴのダウンタウンにある Japan America Society of Chicago（シカゴ日米協会）にて研修を行ってきました。シカゴ日米協会での私の仕事は、イベントのプロモーション（SNS や掲示板などに投稿）、クレジットカードの決済処理、公式ホームページの編集、メールの翻訳、電話応対などが主で、イベントのある日は会場準備や受付をしました。

特に大変だったのはメールの日英翻訳です。日本人の私でも言いたいことの核心が掴めない程、回りくどい文章を訳すときはかなり苦労しました。日本人は婉曲に表現する、とよく言われますが、実際に翻訳するとそれがとてもよくわかりました。メールとなると直接顔を合わすことなく文章だけで相手の気持ちを汲み取らなくてはならないので、なおさら表現の仕方に注意を払います。ですからその間に立つ翻訳者は、書き手の言いたいことがきちんと伝わるように訳すのは大前提として、さらに書き手の表現に込められた丁寧さも表現しつつ訳さなくてはいけないな、と強く思いました。

また、このインターンシップに参加したことで書ききれない程たくさんの経験ができました。常に自分の頭で考えて行動することの大切さ、そして同時に難しさを痛感しました。この経験を生かして前に進んでいきたいです。最後になりましたが、親身にサポートしてくださった KC、KCC の皆様、現地でお世話になった方々、本当にありがとうございました。

シカゴを一望できるジョン・ハンコックタワーにて

インターンシップ参加報告書

人間科学部 心理・行動科学科　3年生

私は8月25日から12日間、ホテルオークラ神戸のインターンシップに参加し、2部門で就業体験をさせていただきました。

レストラン研修では、どの仕事にも重大な責任があるのだと学びました。内部には、一人ひとり異なる役割を連携させたサービスがありました。例えば、接客をするのはウエイトレスの方ですが、お客様の目に映る料理を作るのは厨房の方の手の凝った裏仕事です。私は、従業員一人ひとりの責任の伴う役割が繋がって、お客様の満足と笑顔が生まれるのだと気づきました。

次に、フロントベル研修では、お客様の満足を第一に考えたサービス提供に驚きました。ホテルオークラ神戸の接客にはマニュアルがなく、個性を活かしたサービスを心がけているそうです。お客様一人ひとりの要望に、ノーと言わずにより良い答えを提案し、細かいサービスをプラスして提供していました。私はマニュアル通りにサービスをすることが、お客様に対して平等だと考えていました。なぜなら、マニュアルがなければ従業員の対応の違いに不平を述べるお客様が増えると思ったからです。しかし、ホテルオークラ神戸のノーと言わない経営方針が、そういったケースを招くことなく、その時々のお客様だけの寛ぎや癒しを提供できるのだと学びました。

約2週間の研修で、生きた見本を見て体感し、勉強することができました。この経験を活かして今後の就職活動に目標を持って臨みたいと考えます。

2015年度秋季大学教授会研修会報告

2015年度秋季大学教授会研修会は「本学の強みをアピールするために」というテーマで、10月9日午前10時40分から午後4時過ぎにかけてJD-101などで行われました。

「2018年問題」と言われる18歳人口の減少とそれのもたらす社会的インパクトに対して、本学の良さを高校生や保護者、さらには社会全体に訴えようとする努力が、各部署でなされております。しかしながら、その努力が果たして十分な成果を上げているかどうかについては、私どもには謙虚に反省すべき点もあるのではないでしょうか。

このような問題意識のもと、この度の大学教授会研修会では、株式会社オレンジフリー代表取締役でいらっしゃいます吉田ともこ先生にご講演をお願いいたしました。吉田先生は、個人から有名企業、自治体に至るまで幅広いクライアントに対してブランディング、つまり「売り出し方」をデザインされている方で、ブランド・マネージャー認定協会マスタートレーナーとしても活躍されていらっしゃいます。また「地域創りリーダー養成プログラム」関連科目の非常勤講師として、長年にわたって本学の教学にご尽力くださっております。

午前中には吉田先生が、本学でのご体験を踏まえつつ「大学広報とブランディング」というタイトルで、ブランディングの大事さ、女子大の存在意義、「戻ってきたくなる」という本学の強みについてお話しくださいました。大変な好評をもって迎えられたご講演を踏まえ、午後には参加者の皆様に、各学科として、また大学全体として、それぞれの強みをアピールするための方策について討議していただきました。

院長先生を含む教員70名、職員21名の合計91名が参加した研修会は大変盛況で、今後の本学の在り方にとって意義深いものとなりました。

末筆ながら、会の準備のために奔走してくださった企画評価室及びFDセンターの職員の方々に心より感謝いたします。

（FDセンターディレクター　高橋 雅人）

2015年度大学職員 SD 研修会

大学では、毎年３～４回職員 SD 研修会を実施し、本学の職員としての役割を自覚し、知識を深め、どのように行動するかを共に考える機会としています。今年度も実行委員５名が中心になって、３回の研修会を計画しました。その内、すでに実施した２回の研修会についてご報告します。

お忙しい中、講師をお引き受けくださった方々、ご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

第１回 SD 研修会

日　時：７月30日（木）　13:30～15:15
場　所：デフォレスト館207教室
参加者：39名
研　修：「キャンパスツアーの英語」・
　　「災害発生時の誘導のための英語」
講　師：下村冬彦共通英語教育研究センター専任講師

第１回研修会では、昨年度も実施した英語研修を行いました。開会礼拝の後、斉藤学長より、神戸女学院のために、全員が一つの目標に向かって、失敗を恐れず積極的に業務に取り組むようにとの激励がありました。

本学でも海外からの学生、教職員を支援する機会が増えていますが、多くの職員は、英語での対応に自信が持てず、一部の教職員に任せてしまいがちです。この研修では、共通英語教育研究センターの下村先生に、簡単な英語で意思疎通ができることを学び、より多くの職員が、外国人の学生、教職員への支援ができるようになることを目指しました。

終了後、希望者は川越共通英語教育研究センター教授による「英検対策講座」に参加しました。

第２回 SD 研修会

日　時：９月３日（木）　10:30～15:00
場　所：ホルブルック館301教室
参加者：62名
講演Ⅰ：「聴覚障害者への理解」
講師Ⅰ：特定非営利活動法人 兵庫県難聴者福祉協会
　　宇佐川有美子氏
講演Ⅱ：「サイバー空間の危険から身を守るために」
講師Ⅱ：兵庫県警察本部　サイバー犯罪対策課
　　警部補　本田英里氏

第２回研修会は、二つのテーマについて講演を聞きました。開会礼拝の後、斉藤学長より、今本学で対応が必要な課題について、研修を通じて皆が共通認識を持ち、それぞれの立場で学生の支援に努めるようにとの挨拶がありました。

「聴覚障害者への理解」の講演に先立ち、冨尾学生生活支援センター職員が、今年４月に入学した２名の聴覚障害を持つ学生のための、ノートテイカーなどの支援について現状報告をしました。

講師の宇佐川氏は、ご自身が学生時代に難聴のため勉学に苦労した体験から、学生を支援する大学職員が聴覚障害を理解することで、障害を持つ学生が安心して教育を受けられるようになることを望むと述べられました。一人一人聞こえ方も違い、アイデンティティも違う学生が、その人に合った合理的な支援を受けられるように、本人とまわりの者がお互いに気持ちを合わせて、試行錯誤しながら継続的に考えてゆく必要があることを、宇佐川氏の実体験をとおして教えていただきました。

「サイバー空間の危険から身を守るために」では、LINE、Twitter やその他のソーシャルメディア利用時に巻き込まれやすい犯罪について、気づかずに個人情報をネット上に拡散させている事例や、うかつな情報発信によって思わぬトラブルが起こる事例を聞き、インターネット上に多くの危険性が潜んでいることを再確認しました。サイバー犯罪に限らず、何かあれば匿名でよいので躊躇せずに警察に相談するようにとの助言をいただきました。喫緊の課題として大学生にも聞いてもらいたい内容であったため、講師の本田氏には後日学生寮でも講話をしていただくことになりました。

（大学事務長）

英語研修のグループワーク

岡田山祭～up to you～

文学部 総合文化学科　３年生

神戸女学院大学の学園祭、岡田山祭は両日とも秋晴れの天気に恵まれ、学内外を問わず多くの方にご来場いただきました。１日目にはFM802の番組公開収録を中庭ステージにて行い、ゲストにはBase Ball Bearさんをお招きしました。番組収録とは別に来場者の方からの質問コーナーもあり、軽快なトークと共に会場を盛り上げてくださいました。２日目には講堂にてファッションショーが開催されました。関西コレクションプロデュースということもあり、前評判も大変よく、整理券は全て無くなるほどの人気ぶりでした。期待通り本番も本格的なものとなり、学園祭のレベルを超えたファッションショーを皆様にお見せすることができたのではないかと自負しております。ゲストモデルのダレノガレ明美さん、学内モデル18名によるステージは圧巻でした。

今年の岡田山祭も無事終了いたしましたが、全て私たち実行委員の力だけで成し遂げられたものではございません。大学関係者の方々のご指導やお心遣いを無くしては、成り立たなかったと思います。各方面の方々からの支えによって、活動できたのだということを改めて感じております。委員長という仕事を通してこの３年間は、人との繋がりの大切さ、感謝の気持ちを常に持つこと、今まで当たり前だと思ってしまっていた小さなことに気付くきっかけを与えてくれるものでした。学生生活において貴重な経験をさせていただきましたこと、誇りに思うと同時に感謝いたします。

岡田山祭2015中庭ステージ

大学クローバー賞表彰式

10月23日（金）の大学祭初日のオープニングにおいて、大学クローバー賞の表彰式を、小林学生副部長の司会により実施した。10月下旬というのに、まるで真夏を思わせる日照りの中庭のステージで、健全な学生生活をエンジョイしているであろう学生団体にふさわしい表彰式であった。

大学クローバー賞は、神戸女学院大学に在籍する学生の課外活動を奨励することを目的とし、昨年の９月から今年の８月までの１年間において、顕著な活動あるいは、優秀な成績をおさめた団体の栄誉を讃えて贈られる賞で、連絡協議会委員ならびに学生自治会委員の投票により選考する。

今年度は、ラクロス部、I.S.A.、スカッシュラケット部、コーラス部、学生YMCA、クラシックギター部、の６団体を選出した。それぞれの団体が、学内外で精力的に活動し、数々の大会で優秀な成績をおさめていること、他大学との交流も盛んで成果をあげていること等が評価された。

飯学生部長による受賞団体発表に続き、斉藤学長より各団体に表彰状と賞金が授与された。各団体とも受賞の喜びと今後の抱負を笑顔で語り、斉藤学長が自身の学生生活の思い出を話し、青春への限りない賞賛と励ましの言葉をもって表彰式を終了した。

（学生生活支援センター）

表彰をうける学生YMCA

2015年度「めぐみ会賞」

「めぐみ会賞」とは、公益社団法人神戸女学院めぐみ会が学院立学の精神である「愛神愛隣」にふさわしい課外活動をしている学生・生徒の団体を奨励する為に設けられ、今年で14回目の授与となります。

2015年度大学受賞団体は、「フィギュアスケート部」と「チアリーディング部」です。

「フィギュアスケート部」は、大会出場など顕著な成績をあげられ、今後にも期待をしています。「チアリーディング部」は、慰問などのボランティア活動もなさっていることが授賞理由です。

10月23日(金)雲一つない爽やかな秋空のもと、岡田山祭のオープニングセレモニーで授与いたしました。

今年の岡田山祭のテーマは「up to you」。「人生を明るく生きるも暗く生きるも、すべてあなた次第。だから何事もプラスにとらえて、明るい人生にしていきたいですね。」と、めぐみ会皆本礼子会長が挨拶いたしました。

2014年度中高部受賞団体は「Ｊ家庭科研究部」と「釜ヶ崎訪問」でした。2015年度中高部受賞団体は、１月に選考・表彰いたします。

「めぐみ会賞」は、クラブ・同好会だけでなく、社会貢献活動をしている小さなグループも対象になります。

来年度も多くの応募をお待ちしています。

（公益社団法人神戸女学院めぐみ会　副会長）

大学祭にて皆本会長より授与

＜私の研究＞

私の研究

奥村　キャサリン

大学で通訳という科目を受け持つ者としては、今まで通訳者として培ってきた知識、ノウハウ、スキルを維持し、共有することが自分の提供できる最も大きな価値だと考えています。そのため、現役の通訳者としてもなるべく幅広い分野の現場経験を積み続けることを心がけています。本学に就任するまでは企業での社内通訳の経験が長く、製造、技術、マーケティング、IT、経営戦略などの通訳をしてきました。日本企業に就職される多くの学生に対して、通訳技術だけでなく、企業生活や女性社員としての心構えなど、最近の動向や問題なども共有するようにしています。

現在も幅広い分野（科学・技術から映画祭、取締役会から環境シンポジウム）の通訳に携わる機会に恵まれ、これらの分野での専門用語だけではなく、通訳をする際不可欠になる背景知識の重要性についても学生に伝えているつもりです。

研究においてもやはり現場での問題に焦点を当てています。特に通訳者の業務環境に目を向け、研究に取り組んでいます。通信技術の発達に伴い増えてきている遠隔通訳（通訳者が他の会議参加者とは別の場所から通訳すること）がその一つであり、その難しさが十分理解されていないことを問題視し、現状と今後の展開について調査してきました。また、ビジネス通訳（企業での通訳）に必要となる、通訳技術以外のスキルとコミュニケーション能力の向上との関係について、言語学者のコミュニケーションモデルを使い検証してきました。本学の通訳プログラムの目標の一つは、学生のコミュニケーション能力の向上です。この目標に向かって、通訳の経験と現場での調査・研究を通じて今後とも貢献していきたいと考えています。

（英文学科准教授）

コーパスを使った研究

建石　　始

私はこれまで現代日本語の文法や語彙に関する研究を行ってきましたが、最近はコーパスを使った研究に関心を持っています。コーパスとは、書籍、新聞、雑誌などの文章を集めてデータ化したものです。私がよく使うコーパスは『現代日本語書き言葉均衡コーパス』というもので、書籍、新聞、雑誌といった文章だけでなく、白書、国会会議録、学校教科書、広報紙、Yahoo!ブログ、Yahoo!知恵袋など、さまざまな文章が含まれています。

現代日本語の文法や語彙に関する研究ですが、従来は日本語母語話者の内省に基づいた分析が中心となっていました。つまり、研究者たちが自分自身の語感や直観に基づいて分析を行っていたのです。このような分析方法は、どんなテーマでも分析ができるというメリットがあるものの、どうしても分析が主観的になってしまうというデメリットもあります。また、分析の際に用いられる例文が実際に使われているかどうかがわからない場合もあります。

それに対して、コーパスを使った研究は、分析しやすいテーマとしにくいテーマがあるものの、客観的な分析が可能であり、言語使用の実態に迫ることができるというメリットがあります。

私が取り組んでいるテーマですが、具体的には、「～したばかりだ」と「～したところだ」の違い（「さっき着いたばかりだ」と「さっき着いたところだ」の違い）に関する分析、現実のコミュニケーションにおける「～ないでください」の実態を探る分析、日本語のコーパスと中国語のコーパスを用いた日中対照研究などを行っています。

コーパスを使った研究はやり方さえマスターすれば、誰でもすぐにできるので、学生が卒業論文を執筆する際にもよく指導しています。

（総合文化学科准教授）

＜ゼミ紹介＞

楽譜をよく見て！

岡田　　将

担当は、ピアノ実技、ピアノ重奏、大学院室内楽。１コマ45分、基本的にマンツーマンの個人レッスン。身体の使い方、打鍵の仕方、作曲者や曲にまつわること、また時代背景、楽曲の形式などなど、書き出したらきりがないくらいピアノを演奏する上で大事なことは沢山ある。音楽を楽譜から読み取り、音として、また音楽を１つの形として完成させるのは、容易なことではない。

CD あるいはインターネットの You Tube を通して音楽を楽しむのが非常に手軽になった今の時代、その利便性のおかげで多くの音楽を学ぶものはそれを表面的に模倣するだけの傾向が強く伺える。もちろんそれらを１つの参考として捉えることができればメディアの存在を否定できないが。

ピアノ曲のレパートリーは膨大で、一度はどこかで耳にしたことがある曲が多いのは仕方のないことだが、なるべくそれらを忘れて、まっさらな状態でその曲に触れることがとても大事である。そして、演奏者が一番最初にやるべきことは、楽譜に書いてある指示に忠実に従って音にしてみること。楽譜には音符以外に、拍子、休符、スタッカート、アクセント、スラー、調性記号、臨時記号（シャープ、フラット、ナチュラル）強弱記号、テンポ表示、ペダル、ニュアンスなど、作曲者からのさまざまな指示が記されてある。これらは音自体よりもその音がどういったキャラクターのものなのかを表現する為にとても重要な指示だと思う。これができれば音楽は８割方完成するのになぁ。意外や意外、それがなかなか難しい。

（音楽学科准教授）

レッスン風景

岡田山の自然から学ぶ

遠藤　知二

「動物生態学研究室」という名前でゼミを担当しています。「おもに昆虫やクモが対象」、「フィールドワークは楽しいけど、しんどい」等々、女子大生にはハードルが高めなのか、ゼミ学生の数はそれほど多くはありません。それでも、毎年自然好きで個性的な学生がゼミに入ってきます。

ゼミの研究活動の柱の一つとして、岡田山キャンパスをフィールドにした自然の基礎調査や生態学的な研究を行っています。岡田山がキシノウエトタテグモという希少種の重要な生息地であることが明らかになり、学院が EB 館建築計画を変更して生息地を保護したというのは、有名な話になりましたが、この調査を行ったゼミ学生は、ゼミ以外の学生といっしょになって文字どおり地面に這いつくばってクモの分布を調べ上げました。彼女は働きながらクモの研究を続けていて、10年後のいま岡田山のクモがどうなっているか、追跡調査を計画しています。

現在のゼミでは、灯火採集によって岡田山の蛾類の生息状況を明らかにしようとしている学生や、多くが減りつつあるなか、逆に希少種から普通種になりつつある蝶を本学とお隣の関学の両キャンパスで個体追跡している学生など、自然豊かな岡田山ならではの活動を展開しています。写真は灯火採集をしているところで、岡田山の夜の自然を満喫しています…。

（環境・バイオサイエンス学科教授）

岡田山での夜間の調査風景

＜課外活動紹介＞

学生自治会

学生自治会会長　人間科学部 心理・行動科学科　3年生

「こんにちは、神戸女学院大学学生自治会です！」

春、これから始まる大学生活に胸を躍らせている新入生の前。私たちの活動は舞台上で始まります。

学生自治会の主な活動は新入生対象のクラブ紹介・学内献血・学生アンケートの実施です。

私たちの代、初期メンバーはたったの４名でした。前会長の支えのもと、それらの活動をこなし、ようやく独り立ちできたかなというところで、あっという間に引退となってしまいました。

「楽しいことをしよう」、自分たちが楽しむことから始めよう。これは、私たちが右も左もわからなかった頃から決めている方針です。その結果、徐々に賛同者が集まり、現在では新役員を含めて26名にまで増えました。

今年度は、新入生キャンパスツアーや高岡先生・お料理研究部による講演会など、新たな活動の場をいただきました。様々な方面から声をかけていただけるようになり、とても嬉しく思っています。

さらに新しい試みとして、キャンドルナイトを企画しました。このように、私たちのちいさな思いつきを後押ししてくださる職員の皆様、クラブの皆様、自治会を見守り応援してくださる全ての皆様、そして全国の大学自治会が存続の危機にある中、こうして活動できていることに感謝し、役員一丸となって、この伝統ある神戸女学院をより素敵な大学として盛り上げていきたいと思います。新体制となった学生自治会を、これからもよろしくお願いいたします。

新役員大歓迎です

［クラブ］

写真部

部長　文学部 総合文化学科　３年生

神戸女学院大学写真部です。今私たちは３年生までの部員全員合わせて25名で活動しています。活動の内容は、主に社交館にある部室で行われる週２回の部会を中心に、愛校バザーや文化祭、夏の撮影合宿、学内展示、大学または他の部からの撮影依頼などさまざまです。愛校バザーや文化祭では、毎年部員の撮影した写真のポストカードを販売しています。文化祭は写真の展示もするのですが、今年はテーマの「色」に沿ってカラフルな風船やリボンで飾りつけをするなど、展示方法にもこだわりました。今年は大学や他の部からの依頼も多く、写真部にとって、とても活動的な一年になったと思います。これからも私たち写真部をよろしくお願いします。

今年の夏に行った撮影合宿で撮ったもの
みんなで浴衣を着て、城崎の温泉街を撮影しました。

中高部報告

数学甲子園報告

高等学部　２年生（５名）

数学甲子園本選に出場しました。本選は、制限時間内に問題をチームで解答し、駒を進めます。決勝は与えられたテーマに基づき問題創作とプレゼンをします。私達のチームは昨年準々決勝で敗退し、悔しさをバネに皆で努力を重ね、今回優勝できました。支えて下さった松川先生には感謝の気持ちでいっぱいです。

３回目の挑戦にしての初優勝、うれしいです。結果が出るか不安も大きかったですが、“優勝”という素晴らしいゴールを迎えられて本当に幸せです。

優勝という大きな目標を掲げ、色んな挫折を味わいながらも、みんなと過ごした３年間は私の宝物になりました。目標にしていたメダルを噛めてとても嬉しいです。

皆の甲子園を思う気持ちが、優勝の要因だと思います。この大会に参加し、数学の面白さ、仲間と協力することの難しさや重要性を再確認できました。

数学甲子園に向けて努力してきたことが実を結び、嬉しく思います。仲間と共に大好きな数学の大会で優勝できたことは、高校時代の一番の思い出になりそうです。

問題を分担して解いたり、問題創作の難しさや楽しさを味わったり、数学について語ってもらったり…甲子園に向けてメンバーと過ごした時間はかけがえのない思い出です。

国際哲学オリンピック inエストニア

高等学部　３年生

５月14日～19日、エストニアで開催された国際哲学オリンピックに参加しました。哲学オリンピックとは、1993年に東欧で始まった高校生の哲学エッセイコンテストです。今大会は、セレモニーで始まり２日目にエッセイライティング、３・４日目はディスカッションや市内観光という日程でした。

エッセイライティングでは、その場で与えられた哲学者の言葉４つのうち１つを選んで関連したエッセイを書きます。今回私はフレーゲの言葉を選択したのですが、それが予想以上に難しく時間内に完成させることができませんでした。悔しさは残りますが、今後につながる良い経験になったと思います。

３日目以降は、エッセイライティングの緊張感からも解放され思う存分楽しめました。最も印象に残っているのはやはり各国の代表との交流です。例えば４日目の夜にはリトアニアからの参加者と互いの国の哲学の話をして、私は彼女に西田幾太郎の純粋経験の思想を説明しました。日本語でも説明しにくい事柄を英語で説明するのは至難の業でしたが、彼女は興味を持ってくれたようでとても嬉しかったです。その他にも、朝食の席で哲学と他の学問との繋がりについて話したことや、アルゼンチン代表の２人に折り紙を教えたことなど、思い出は尽きません。

今回の哲学オリンピック参加にあたっては、大変多くの方々に支えていただきました。その一人一人に心から感謝します。ありがとうございました。

高等学部校内大会

2015年度の高等学部校内大会は、１学期期末試験終了後の７月６日(月)に行われました。種目はソフトボール、バレーボール、バスケットボール、卓球、リレーの５種目で、全学年クラス対抗戦で試合が行われます。時折小雨が降る中、リレーの予選と決勝を連続で行い、ソフトボールも雨に負けずどの試合も白熱していました。今年は先輩に全力で挑むＳ１、Ｓ２学年の頑張りが印象的でした。最後は勝者も敗者もお互いを称えあい、涙と感動の思い出に残る１日となりました。

ソフトボール
　１位Ｓ２Ｂ　２位Ｓ２Ａ　３位Ｓ２Ｃ
バレーボール
　１位Ｓ１Ｃ　２位Ｓ３Ｂ　３位Ｓ３Ｃ
バスケットボール
　１位Ｓ３Ｃ　２位Ｓ３Ｂ　３位Ｓ２Ｂ
卓球
　１位Ｓ３Ａ　２位Ｓ１Ａ　３位Ｓ１Ｃ
リレー
　１位Ｓ３Ａ　２位Ｓ３Ｂ　３位Ｓ２Ａ

総合
　１位Ｓ３Ａ　２位Ｓ３Ｂ　３位Ｓ１Ｃ
ブービー賞
　Ｓ１Ａ

（Ｓ校内大会係）

中学部校内大会

７月８日(水)中学部校内大会が行われました。開会礼拝後、ポートボール・卓球・ドッジボールａ・ｂの３種目に分かれ、クラス対抗で試合を行いました。リレーは雨天の為、午後に実施しました。各種目どのチームも、この日に向けて練習を重ねてきました。白熱した試合が続き、心地よい疲労感の中、閉会式では皆の健闘を称えあいました。

結果だけでなく、その過程において精神的にも大きくさせてくれるのがスポーツです。スポーツを通し自分自身を高める喜びや、クラスの一員としての役割などを感じる一日になったと思います。Ｊ体育部員も協力して大会を運営し、怪我などもなく無事終えることができました。１学期の締めくくりの行事として、皆の良い思い出となりました。

総合
　１位Ｊ３Ｂ　２位Ｊ３Ｃ　３位Ｊ２Ａ
ドッジボールａ
　１位Ｊ２Ａ　２位Ｊ３Ｂ　３位Ｊ３Ｃ
ドッジボールｂ
　１位Ｊ３Ｃ　２位Ｊ２Ａ　３位Ｊ２Ｂ
ポートボール
　１位Ｊ３Ｂ　２位Ｊ３Ａ　３位Ｊ２Ｃ
卓球
　１位Ｊ３Ｂ　２位Ｊ２Ｃ　３位Ｊ２Ｂ
リレー
　１位Ｊ２Ｂ　２位Ｊ３Ｃ　３位Ｊ３Ｂ

（Ｊ校内大会係）

釜ヶ崎訪問報告

高等学部　１年生

駅のホームを出るとそこはごくありふれたような景色が広がっていました。しかし歩いているうちに私達女子高生はどこか場違いなのではないかと思える景色へと変わっていました。いこい食堂へ到着して、一息つく間もなくすぐに米加田先生におにぎりの握り方を教えていただき作業に取り組みました。なんとか時間内に作り終えることができ、すぐ配給に移りました。食堂を出ると向かいの公園にはたくさんの方達が並んでおられ、それは私が来る前から想像していた通りの光景でした。古くなった服をまとい、性別は男性、歳は５、60歳。何に対しても抵抗がありませんでした。全てが中学生の頃から礼拝報告で聞いていた通りでした。しかしその時、自分がとうの昔にそういった表面的な事実を既に飲み込んでいて、それで良いと満足していたことに気付かされました。単なる上辺だけの事実だけを知り、それで終わってしまってはいけないのです。釜ヶ崎訪問ではその上で事実の裏に隠されたことを直接自分で見聞きするという大切な経験をさせてもらいました。ホームレスの方がどのような経緯でそうなってしまったかということ、日雇い労働の詳しい内容、米加田先生自身のお気持ちと決意など挙げ出すときりがありません。釜ヶ崎に行かなければ、そのような事実とは直接向き合い、より深く現状を理解して考えることはなかったでしょう。今回はそのような機会に恵まれたことに心から感謝いたします。

長島訪問へ行って

高等学部　１年生

長島訪問への参加を決めてから、そこへ実際に行って自分には一体何ができるのだろうか、自分たちにはどのようなことが求められているのだろうかという疑問と不安感が募っていました。もちろん学ぼうという積極的な意思で参加を決めたのですが、そのことがずっと頭を離れませんでした。しかし、１日目の夜にもった話し合いの場や先生方のお話を通じて、また他の友人たちの意見を聞く中で、自分がどのように考え、何をすべきなのかということを明確に感じました。

ハンセン病患者に対する社会の偏見や、その人権を著しく侵害した隔離政策の歴史という過去について知り、考えることは、もう同じような悲惨な出来事を起こさないように将来のあり方を考えることでもあること。苦しみの中にあった人々が拠り所とし、人間らしくあろうとする力強さとなった信仰というものの力。私たちが当たり前にもっている、将来の目標や勉強ができる環境、友人、家族といったあらゆるものを奪われ失った人々がいること、そしてそれらがいかほどに大切で貴重なものであるのか。「証人として生きる」ことこそが私たちに求められていること。

生憎の天候の影響で、曙教会での祈祷会に参加できなかったことが残念でしたが、この２日間の中で色々なことを学び、考える機会が与えられました。この訪問で得た学びを心に留め、毎日を大切に生きるものでありたいと思います。

夏の修養会　広島訪問報告

高等学部　１年生

私たちは７月31日から８月１日にかけて、夏の修養会広島訪問に参加させていただきました。

訪問中、広島女学院の方々と多くの時間を過ごすことができました。交流会では、新たに学ぶことや考えることがあり、とても刺激的でした。碑巡り案内では広島女学院の方々が公園内を巡りながら、そこで起こった出来事などを話してくださいました。街頭署名では署名をお願いした方が自分の考えを話して下さったりして得るものが大きかったです。碑巡り案内や資料館の見学などで原爆の凄まじさを物語る建物や制服を見て、70年前この場所で起きていたことを思うといたたまれない気持ちになりました。

１日目の夜に被爆者の方に原爆の証言を聞かせていただきました。印象に残っているのは、その方が原爆を落とされたことに関して「でも、それでもね、良かったと思ってるんですよ」と仰っていたことです。私たちには想像もできないような苦しみを経験しているはずなのになぜ「良かった」と言えるのか、私にはまだ理解できません。

「原爆を知ろう」と思って広島訪問に参加し、自分で整理がつかないままたくさんのことを見聞きして、私は自分の知ろうとしていたことがどれほど大きく重いものだったかを知りました。今回私たちが受け取ったメッセージは一人一人違うと思いますが、個々がそのメッセージの意味をこれからも考え続けていくべきだと思います。

リーダーシップトレーニングキャンプ

７月20日（月）～22日（水）の２泊３日、生徒50名と教員６名は、山東自然の家にリーダーシップトレーニングキャンプ（リートレ）に行きました。リートレの目的は、生徒たちが様々な活動を通して協力し、リーダーシップを身に付けることと、来年度のＪ１デイキャンプ（Ｊキャン）で新入生を迎えるための準備をすることです。テント張りや野外泊は行わず、そのかわり、コミュニケーション能力や、チームで協力して課題を解決する力を育むような企画を、生徒たちが考え、実行しています。

初日はまず班ごとに分かれ、Ｊキャンで新入生にジグソーパズルを制作させる企画を模した活動と、コミュニケーション能力に関する活動を行い、それから夕食を自炊しました。２日目は、Ｊキャンで新入生にオリエンテーリングをさせることを模して、自然の家の館内でオリエンテーリングを行いました。その後グループに分かれてクイズに取り組んだり、旗づくりなどを行いました。夕食は恒例となった自炊コンテストでした。薪とかまどだけでどうやってこんなものを作ったのだろうというものも登場し、驚かされました。夜にはメディテーション・カウンセルファイヤーを行いました。３日目は、Ｊキャンで行うことを考えたレクリエーションを行い、安全性等についてシミュレーションしました。

生徒たちがこの２泊３日で身に付けたことを、今後の学校生活でも生かしてくれると期待しています。

（ディレクター）

訪米語学研修旅行を終えて

2015年度訪米語学研修旅行は、7月12日(日)～8月3日(月)まで、S1生徒24名と引率3名（1名10日間、2名23日間）で、セントクロイ高校のEnglish Campに参加しました。ミネソタ州にある私立のキリスト教主義の中学高校で、今年は夏にできたばかりの新築の寮に滞在し、中国、韓国、ベトナム、ブラジルの生徒たち約60名と一緒に過ごしました。寮は2人部屋で、談話室、ミニキッチン、シャワーと洗面台を共有し、幸い本校生徒だけで寮のウィングを貸し切りにしていただけ、非常に快適に過ごしました。夏のミネソタは夜9時ごろまで明るいので、最初は驚きましたが、3週間で当たり前になり、日本に戻ってくると日が暮れるのは早くて変な感じがしました。

語学研修のメインである勉強は、毎朝8時から礼拝、8時15分から授業が始まり、午前中に4コマ授業がありました。最初にクラス分けのテストを受け、3週間同じクラスで学びます。授業はグループやペアで活動することが多く、他国の生徒と伝え合う努力をしていました。英文を読んで話し合ったり、英語で日記を書いたり、特別授業として、社会、数学、理科を英語で勉強したりしました。社会ではアメリカの歴史や地理、世界の地理など、数学や理科は基本的には既に習っていることが多かったのですが、それを英語で他の生徒に説明したり、ディスカッションしたりすることが大変だったようです。

午後からも毎日アクティビティーが準備され、あちこち観光に連れて行ってもらいました。アメリカ人のリーダーたちがお世話をしてくれ、班ごとにミシシッピ川のクルーズ船に乗ったり、オペラ劇場の裏側を見せてもらったり、ミネソタ大学や科学博物館に行ったり、ビーチや遊園地で遊んだり、メジャーリーグを見に行ったりしました。夕食後にもプログラムが組まれ、ぎっちりと予定が詰まっていて、非常に忙しくも充実した毎日を送りました。最終日には各クラスで勉強したことをプレゼンテーションで発表し、修了書をもらいました。夜にはタレントショーという、各グループが出し物を発表する機会があり、本校の生徒たちは事前に法被を準備して、ソーラン節を披露しました。大変好評で、多くの人に喜んでいただきました。

研修旅行中の1週目の週末には、KCCの理事の方にご尽力いただき、ホームステイを体験させていただきました。1家庭に1名または2名預かっていただき、週末思い思いに過ごしました。1学期からｅメールのやりとりもでき、事前に連絡をしていたので、すぐに打ち解けることができたようです。2泊3日でしたが生徒たちの満足度もとても高く、もっとホームステイをしたいという意見が多かったです。KCC理事の方には様々なサポートをしていただき、大変お世話になり、感謝しております。今後もKCCを通してホームステイが継続できることを願っています。何名かのホストファミリーは最終日のタレントショーを見に来て下さいました。元教員や元KCC会長もホストファミリーになって下さいました。各家庭での過ごし方は様々でしたが、湖に連れて行ってもらったり、カヌーをしたり、バーベキューをしたりとミネソタの夏を満喫したようです。

最初はあまり他の国の生徒たちと関わりにくい様子でしたが、最終週までには、アメリカ人だけでなく、他国の生徒とも仲良くなり、お互いを知るきっかけになったことが、このプログラムの大きな魅力であると思います。治安のいい地域で安全である点、KCCのサポートが受けやすい地域であることも、今後このプログラムを続けるにおいてのメリットであると思います。非常に有意義な3週間を過ごすことができ、プログラムをお支え下さった方々に心より感謝申し上げます。

（中高部英語科）

夏山登山

今年の夏山登山は、南アルプスの甲斐駒ケ岳・仙丈ケ岳に登りました。参加者は生徒45名（J２～S2)、教員９名の54名に、現地ガイド３名と添乗員１名の総勢58名のパーティーでした。

１日目、伊那市より林道バスにて北沢峠まで上がり、大平山荘に到着。

２日目、午前２時半起床、まだ暗い中、４時に甲斐駒ヶ岳山頂目指して宿を出発しました。学年別に３パーティーに分かれて行動しました。双子山、駒津峰を経てやっと甲斐駒が見えてくるという、長くアップダウンの激しいコースでしたが、無事全員が登頂を果たすことができました。

３日目、午前３時起床、仙丈ケ岳に向け４時半に出発。急坂を登りきると目の前に大きくカール地形が広がりました。天気は終始快晴で景色が良く、日本で標高１～３位の山々（富士山・北岳・間ノ岳）を眺めながら尾根歩きをすることができました。

４日目はバスで下山し、恵那峡で入浴・昼食後、西宮北口で解散しました。

携帯の電波が届かない山の中、45人の大部屋での３連泊は、普段の生活に比べて不便を感じることもありましたが、学年を超えて助け合う場面も多く、大変貴重な経験となったことでしょう。伝統ある「夏山登山」がこれからも様々な方のご協力のもと、安全に実行していけるよう願っています。

（夏山登山ディレクター）

2015年度中高部受け入れ留学生

本年度は、姉妹校 MLC からの長期留学生がなく、４月から受け入れる予定だった AFS の生徒が間際に来日できなくなったため、１学期は受け入れ留学生はひとりもいませんでした。

２学期になって、AFS セメスター・プログラム生（９月から２月上旬）を受け入れることになり、アメリカ合衆国バージニア州より１名が、S2A に編入しました。

日系アメリカ人のお父さんと、ドイツ語圏スイス人のお母さんの間に生まれた彼女は、ドイツ語が堪能ですが、日本語を習うのは初めてで、来日以来一生懸命勉強しています。サッカーやラグビー、テコンドーが好きで、クラブはフットサル部にはいっています。10月には、北九州方面への修学旅行に参加し、友人たちと楽しい５日間を過ごしました。12月には、冬山スキーに参加予定です。２月上旬まであっという間ですが、彼女の片方のルーツである日本の文化を存分に味わって帰国してほしいと思っています。

（留学生係）

アメリカ　AFS 生

みなさん、こんにちは。わたしはアメリカからきました。

らいねんの２月までにほんにいます。わたしのそふはにほんじんですから、にほんのぶんかがしりたいです。そしてにほんごをべんきょうしたいです。にほんは、ひとがしんせつで、たべものがおいしいですから、にほんにきてよかったです。よろしくおねがいします。

中高部　教職員研修会

個人情報保護のため、一部削除しています。

2015年度文化祭 “Shangri-La”

文化祭企画実行委員長

今年度は “Shangri-La” をテーマに文化祭を行いました。２日間を通してよいお天気にめぐまれ、特に大きなトラブルもなく無事進めることができました。

学年やクラスでの出し物はさまざまな種類の展示やゲーム、劇などがあり、全団体それぞれの個性が存分に生かされていました。例年以上にバラエティー豊かで色々な方に飽きることなく楽しんでいただけたと思います。クラブや有志団体の展示は夏休みを中心に長い時間をかけて準備した成果が発揮され、それぞれの熱意が伝わるクオリティーの高いものでした。文化祭を最後に最高学年が引退するクラブも多く、本人たちにとってはもちろん、思いの詰まった展示や舞台からは見る人にも感動が伝わったのではないでしょうか。

年齢や性別を問わずどんな人にも楽しんでもらえる文化祭にすることを目指して、文化祭企画実行委員会でも展示内容を調整したり企画を用意したりとたくさん工夫してきました。新しいことをするのは決して簡単ではありませんでしたが、狙い通り多くの方に楽しんでいただけたようで嬉しい限りです。昨年度から地道に会議や作業を重ねて作った装飾もたいへん文化祭の雰囲気を盛り上げてくれました。写真を撮っておられるお客様も多く、細部までこだわった華やかな装飾は、やはりこの学校の文化祭の大きな特長の一つのように思います。

学年やクラスの展示を作る人。クラブや有志団体として準備する人。ステージに立つ人。それらを裏方で支える人。そして何より欠かせない、文化祭を楽しむ人。いろんな立場から関わる人がいて、はじめて文化祭は成り立ちます。そして生徒一人一人に、自分はどのような立場で文化祭に関わるのかを選ぶ自由があります。積極的に委員になったり進んで準備したりするもよし、あくまで受け身でいるのもそれはそれでよし。神戸女学院の「自由」の象徴のような行事だな、と一年間文企長として文化祭全体を見渡してきて思いました。

文化祭テーマ “Shangri-La” の意味は、「地上の楽園」です。文化祭を作り上げる過程はお世辞にも楽園とはいえないような険しいものでしたが、９月18日と19日の２日間、数えきれないほどたくさんの笑顔が輝いていた中高部はまさに “Shangri-La” でした。生徒それぞれがいろんな思いを抱えながら一生懸命準備してきた努力が実り、本当に素敵な文化祭となりました。

校外からお越しくださった何千人ものお客様方、そしてこの文化祭を支えてくださった全ての方々に心から感謝いたします。本当にありがとうございました。一人ひとりが自由に輝くことができる、神戸女学院らしい素敵な文化祭がこれからも続いていくことを願っています。

芸術鑑賞会

今年度の芸術鑑賞会は、古典芸能として落語を鑑賞しました。そして、今回はさらにその日本の伝統文化である落語の魅力を広く海外へ伝えようとしている桂かい枝さんによる英語落語とスライドトークを織り交ぜ、バラエティー豊かな寄席となりました。

2015年９月24日、午前中に文化祭の片づけを終え、13時５分に講堂に集合。なじんだ講堂はすでに高座と屏風とめくりがしつらえられ、寄席として生徒と教員を迎えました。軽快な出囃子と共に登場は笑福亭喬若さん、演目はおなじみの「時うどん」。続いて、色物として鏡味正二郎さんによる「太神楽曲芸」。途中では生徒の体験の機会もあり、楽しくも緊張感あふれる芸を鑑賞しました。さてここからは桂かい枝さんの魅力あふれる演目が続きます。まずは古典落語「お初天神」。マクラから存分に笑っているうちに次第に舞台はお祭りの場面。親子のとぼけた会話にほのぼのとした空気が講堂に満ちました。休憩をはさんで、かい枝さんによるスライドトーク。海外の多くの国々で落語に挑戦した際のハプニングや、日本の古き英語教育のあり様など、興味ある内容に落語同様、大爆笑でした。そして最後を飾るのは英語落語。古典芸能とは呼べない新鮮さに、言葉の新しい可能性を垣間見たような気がしました。

今年度は２日間の文化祭の延長としての日程で、それも講堂で行うことで、素敵な「シャングリラ」に花を添えた場であったなら幸いです。

（視聴覚委員会）

Ｊ１秋の遠足

10月16日（金）８時に西宮北口を出発、バスで徳島県鳴門市、大塚国際美術館と大鳴門橋遊歩道「渦の道」に行きました。

美術館に行くにあたり、事前学習として班ごとに絵画作品や画家について調べた内容を探究の時間にプレゼンテーションしました。当日は、クラスごとに学芸員の方の案内に従って、環境保存されているミケランジェロ作システイナ礼拝堂の壁画と天井画、ダ・ヴィンチ作修復前と後の壁画「最後の晩餐」、ピカソ作「ゲルニカ」、様々な画家による「受胎告知」などの作品を鑑賞後、班ごとに自分たちが調べた作品や他の班のプレゼンテーションを見て興味を持った作品などを約１時間半の間自由に見学しました。午後は鳴門公園「うづの家」で礼拝、昼食後、班ごとに「渦の道」を見学。渦の道は大鳴門橋の橋桁にある全長450m の遊歩道で、床が一部ガラス張りになっており45m の高さから渦を見ることができる施設です。満潮時刻に合わせて時間を設定したため、迫力のある渦を見ることができました。好天にも恵まれ雄大な海の景色も存分に味わいました。交通渋滞のため予定より30分遅れ西宮北口で解散。出席140名。引率教員は８名でした。

（Ｊ１学年主任）

Ｊ２秋の遠足

10月16日（金）、バスで奈良方面に行ってきました。午前８時30分に西宮北口を出発し、午前10時30分に法隆寺に到着しました。予定より大きく遅れたので、２時間見学を１時間に短縮しました。事前に見所など学習したこともあって、短い時間を有効に使って見学していました。

次に奈良市内に向かい、「なら和み館」で昼食をいただきました。みんなは、すぐに昼食をたいらげ、予定より10分早くならまち自主研修を開始しました。ならまちを中心に、見学や散策を楽しんでいました。地図を片手に迷ったり、おいしいものを探したり、みんな奈良を満喫していました。午後４時になり、バスに乗り込み、西宮への帰路につきました。最初から最後まで、みんなが楽しく、元気で過ごした遠足でした。

引率教員は７名でした。

（Ｊ２学年主任）

Ｊ３小旅行

10月14日（水）、Ｊ３生徒と引率教員６名は、西宮北口に集合し、バスで小旅行に出発した。途中S.A.で２度の休憩をはさみ、「ゆのくにの森」へ到着。昼食後に友禅や九谷焼の絵付け、金箔といった伝統工芸を体験した。その日は旅館で金沢の歴史と文化についての講演会があり、生徒達は熱心に聞いていた。金沢への愛着が強く感じられる講演会であった。

翌15日（木）は班ごとに分かれて金沢の町を自由行動。いくつかのグループは妙立寺（通称忍者寺）に行き、別のいくつかのグループは金沢商業高校のガイドで兼六園を案内してもらった。近江町市場やひがし茶屋街等、それぞれが計画し興味を持った場所を訪れた。

午後は、白川郷を訪問。ちょうど「どぶろく祭り」が開催される日で、そのためにいくつか見学することのできない施設もあったが、人がいっぱいで、祭りの雰囲気を楽しむことができた。五平餅の食べ歩きに興じた生徒も多くみられた。

晩は、高山のホテルでテーブルマナーの講習を受けた後、さるぼぼ作り。生徒一人ひとりが自分だけのさるぼぼを作った。

最終16日（金）は班ごとに高山の自由研修。少し寒い朝であったが、生徒達は元気に高山陣屋や朝市などを見て回った。

バスに乗って帰路へ。西宮北口で解散。大きな混乱もなく無事、行程を終えることができた。

（Ｊ３学年主任）

S1一泊研修（近江八幡）

S1生徒は、10月15日（木）～16日（金）の1泊2日で、近江八幡方面へ一泊研修に行きました。1日目はまず彦根城に行き、天守閣や彦根城博物館、玄宮園、そしてひこにゃんなどを自由に見学しました。その後宿泊場所である休暇村近江八幡に行き、この一泊研修の主目的である生徒同士の話し合いを行いました。「理想の大人」について話し合った結果を漢字1文字（創作してもよい）で表現したり、「好きと愛」の違いについて議論しました。話し合い時間を超えてもずっと議論していたグループもあったようです。いつも話す仲間とは違うメンバーでの議論なので、新たな発見もあったようで、楽しく話し合いができたようです。夕食後にはレクリエーションをしました。委員たちが企画したゲームやクイズで大変盛り上がり、楽しく過ごすことができたようです。

翌日は、近江八幡市街と琵琶湖博物館を見学しました。近江八幡市街では、出発前に事前学習したヴォーリズさん縁の建築を見て回ったり、近江八幡名産の食べ物やお土産を探したりして、十分堪能していたようです。また琵琶湖博物館では、水族館の部分がリニューアル中で見学できませんでしたが、そのかわりに企画特別展示「琵琶湖誕生」を見学することができ、特異な湖である琵琶湖の歴史について深く学ぶことができました。

（S1学年主任）

S2修学旅行報告

S2は10月12日（月）から16日（金）まで、4泊5日で北九州に行って参りました。欠席者が2名あり、参加生徒は留学生1名を含めて125名、付き添い教員6名、看護師1名、近畿日本ツーリストから添乗員3名で、合計135名でした。

行程は、1日目に新大阪から新幹線で博多へ、そこからバスで吉野ヶ里遺跡を経由して平戸。2日目は午前中に平戸を自由研修し、午後に長崎へ移動。浦上天主堂で深堀茂美さん（85歳）から被ばく体験と信徒としての証を聴きました。3日目は長崎1日自由研修。約30名が軍艦島ツアーに出かけたほか、ハウステンボス、西海パールシティー、外海へ足を伸ばした班もあれば、長崎市内で原爆や平和関連の施設を訪問したり、ご当地食やスイーツを堪能した班もありました。全グループが所定の時刻以前に帰着したのは立派でした。4日目は、阿蘇噴火の影響で直前にコースを変更して由布院へ。昼食後に街を散策した後、熊本大分県境に位置する杖立温泉に到着。レトロな雰囲気の温泉街で夕方の散歩を楽しみました。夜は恒例のレクリエーションで盛り上がりました。最終日は、三池炭鉱の万田抗を見学し、柳川へ。川下りの後、御花で最後の昼食をいただき、久留米駅から九州新幹線に乗車して戻って来ました。

お天気に恵まれ温かい日が続いたためか、体調を大きく崩す生徒もなく、事故なく無事に全行程をほぼ予定どおりに進めることができました。感謝。

（S2学年主任）

S3秋の遠足

10月16日(金)、京都嵐山に行って参りました。

午前８時10分に西宮北口の兵庫県立芸術文化センター横を出発し、名神高速道路、京滋バイパスを経由して、まず八つ橋庵とししゅうやかたに行きました。そこでは八つ橋、ねりきり、亥の子餅の３つのグループに分かれ、和菓子作り体験をしました。生地を蒸したり、餡を丸めたりするところから始め、成型まで自分自身で行い、友達と出来上がった和菓子を見せ合ったり写真を撮ったりして盛り上がって楽しみました。

再度バスに乗車して嵐山に行き、渡月橋前で各クラス集合写真を撮影した後、昼食までの間、自由に嵐山の街を散策しました。

12時25分に昼食会場である「渡月亭」に集合し、食前感謝礼拝をした後、京懐石「京の玉手箱」(小鉢、御造里、温物（湯豆腐)、玉手箱（２段のお重)、吸物、御飯、水物（大福)）を、会話を弾ませながら美味しく頂きました。

昼食後はクラス毎に集合写真を撮り、ほぼ予定通り13時45分に現地で解散し、その後は各自自由に、お土産を買ったり、観光したりしました。

天候にも恵まれ、特にトラブルもなく、無事に秋の遠足を終えることが出来ました。

参加生徒は134名。引率教員は７名と添乗員１名でした。

（S3C担任）

校内読書感想文コンクールについて

今年度も夏休み中、J２とS２は宿題で、その他の学年は自由参加で校内読書感想文コンクールをおこなった。先生方から推薦された優秀作を、図書委員の先生方が審査して、以下のように入選作を決定した。また、校内選考で決定された優秀作は兵庫県私立学校読書感想文コンクールへ応募し、特選３名(☆印)、入選３名（◇印）に入賞した。

11月５日(木)の礼拝時に、校内コンクールの表彰式をおこない、S2Aの生徒が自作の朗読をした。

個人情報保護のため、
一部削除しています。

個人情報保護のため、一部削除しています。

中高部 キャンパス見学会

昨年より２週間ほど遅い11月21日（土）、キャンパス見学会が行われました。心配していた天気も崩れず、昨年より200名ほど多い559組1330名の来場者があり、盛況のうちに終えることができました。

午前は、入学試験説明会、学校説明会（生徒による英語スピーチ、卒業生によるスピーチ、数学、聖書、理科による教科プレゼン）、自治会によるキャンパスツアー、シェイクスピアガーデンの植物観察やプラネタリウム教室など、学校を紹介するプログラムを中心に進めました。午後は、模擬授業や生徒によるクラブ活動を中心としたプログラムで行われました。

また体育室では昨年と同様に各教科が日頃からどのような授業を展開しているのか、教科毎にブースを設けました。昨年より多くの教員を配置することで教科に関する質問にも答えられるようにしました。

また模擬授業も昨年は１つしか応募できなかったのに対し、今年は１時間目、２時間目と１人２つまで応募できるようにしたところ、昨年を超える応募者があり、特に理科系の模擬授業では定員の２倍近い応募がありました。残念ながら当選しなかった人達の立ち見が教室の外まであふれるほどだったのが印象的でした。

昨年を踏襲しつつも、より丁寧に、そしてより楽しめるように、教職員そして当日のお手伝い生徒が一つとなって取り組めたと思います。今後も「入学したい」と魅力を感じていただける学校をみんなで作り、それを発信していけたらと思います。

（校務課広報係）

「秋の子ども会」報告

去る11月23日、今年度も神戸女学院を会場にして、秋の子ども会が開催されました。当日は、有志のグループリーダーと高等学部の新旧役員会のメンバーが入念な準備をして、神戸真生塾の子どもたち15名の到着を待ちました。

朝10時過ぎに開会、今回の実行委員長であるＳ３生徒による開会宣言がなされた後、外で遊ぶ子どもたち、屋内で折り紙に興じる子どもたちに分かれ、子どもたちのそれぞれが「自分だけのお姉さん」とのひとときを満喫しました。

お昼は、Ｓ役員会の新メンバーが腕によりをかけたハヤシライスとポテトサラダが試食室にて振るまわれました。お代わりする人も続出し、お腹も心も満足できるひとときとなりました。

午後は、生憎のお天気であったため、ビンゴゲームをしたり、ポップアップカードを作成したりと、屋内で楽しい時間を過ごしました。そして、午後２時過ぎに、役員会メンバー手作りのチョコレートゼリーをいただいた後、子どもたちは、多くのお土産を抱え、本校のスタッフに見送られ、笑顔で帰って行きました。

スタッフの尽力で、すべてが非常にスムーズに進行した一日でした。秋の子ども会を成功に導いてくださったすべての方々に心より感謝申し上げ、「報告」とさせていただきます。なお、引率教員は３名でした。

（高等学部役員会顧問）

＜課外活動紹介＞

［クラブ］ **Ｊ新体操部**

中学部　２年生

新体操はリボンというイメージがありますが、手具は毎年決められていて、今年はボールが団体種目になっています。２分30秒の音楽に合わせて正確に技を行い芸術性を競う採点競技です。

試合で自分達がやってきたことの全てを出し切れた時の達成感は、厳しい練習にも負けずに頑張ってきたから味わえるかけがえのないものです。仲間との絆を大切にし、緊張に負けないように努力を積み重ねていきたいと思います。お互いに高め合いながら部員全員が輝けるようにこれからも頑張っていきます。

［クラブ］ **Ｊ文芸部**

Ｊ文芸部について

ひそやかに才人が集うのがＪ文芸部、と言っても過言ではありません。

各人の努力の賜物である作品をまとめた冊子を年に数回発行していますが、仕上がった冊子を廊下に設置した小机の上に並べますと、多くの読者が待ってくださっているのでしょうか、すぐに「完売」となるようです。

部員同士、仲が良く、文化祭の際には皆で助け合い、凝った展示物を着実に仕上げていました。夏の合宿でも笑顔がいっぱいでした。

（Ｊ文芸部顧問）

［クラブ］ **Ｓダンス部**

高等学部　２年生

皆で作り上げる舞台

私たちは、柔軟や筋トレなど基礎練習に励みつつ、年に３回の舞台に向けて日々練習しています。５月の愛校バザー、９月の文化祭、12月の聖なる集いです。

初心者が多く指導者もいないので大変な部分もありますが、OG の方々から助言をいただき、部員同士教え合いながら楽しく活動しています。今年はヒップホップやロック、ガールズなど幅広いジャンルに挑戦しました。舞台前は毎日練習があり忙しくなりますが、皆で一つの舞台を作り上げる達成感はなにものにも代え難く、貴重な経験です。

［クラブ］ **Ｓ料理研究部**

高等学部　２年生

Ｓ料理研究部では、週１～２回の活動で、部員が作りたいものに挑戦しています。夏合宿では、たくさんの餃子を作って焼いたり、班毎にキャベツを１玉使って趣向を凝らした創作料理をしたりしました。そして、普段の活動の成果を発揮する場として、バザー・文化祭に出店をし、お客様に提供させていただいています。また、自治会主催の春と秋の子ども会やクリスマスのサンタクロースとして、施設の子ども達にお菓子のプレゼントをしています。これからも伝統を守りつつ、活動を有意義なものにしていきたいです。

〈学 院 日 誌〉

9月9日(水)	中高部教員会議
9月18日(金)(校内用)・19日(土)(校外用)	中高部文化祭
9月24日(木)	中高部教員会議
9月29日(火)	中学部入試説明会
9月30日(水)	理事会
10月7日(水)	中高部教員会議
10月10日(土)	創立140周年記念行事
10月12日(月)～16日(金)	高等学部修学旅行
10月14日(水)～16日(金)	中学部小旅行
10月16日(金)	教授会
10月21日(水)	中高部教員会議
10月28日(水)	理事会
11月4日(水)	中高部教員会議
11月18日(水)	中高部教員会議
11月20日(金)	教授会
11月21日(土)	キャンパス見学会
11月25日(水)	理事会
12月2日(水)	中高部教員会議
12月16日(水)	理事会
12月17日(木)	中高部教員会議
12月18日(金)	教授会

目 次

創立140周年記念礼拝　院長式辞……1
「創立140周年記念行事」報告……3
創立140周年記念講演会……3
KCC だより……4
神戸女学院家庭会報告……6
春季公開講座報告……6
2015年度　愛校バザー会計報告……7
学院リトリート報告……7
2015年度　宗教強調週間……8
新任のことば……10
退職のことば……10
史料室の窓・デフォレスト先生の家……11
留学報告……12
人事・慶弔・栄誉・永年在職者表彰・記念賞……12
新刊一覧……13
新刊紹介……14
オフィスの宝物……15
大学報告
Prof. Dale Bauer と Prof. Gordon Hutner の講演会……16
子どものための七夕コンサート……16
地域創りリーダー養成プログラム（副専攻）報告……17
心理相談室ウィーク 講演『性格について考える～精神分析的観点から～』……17
企業訪問　～学生のよりよい就職のために～……18
総合文化学科プロジェクト科目体験学習報告……18
「神戸女学院の100冊」書評コンテスト……19
Kobe College & Mozarteum Friendship Week 2015……19
日本･ASEAN ユースリーダーズサミットに参加して……20
第6回絵本翻訳コンクール……20
留学生紹介……21
受入れ留学生報告……21
派遣留学報告……23
語学研修報告……25
学生の活動紹介……27
音楽学部夏期講習会報告……28
保護者懇談会報告……28
夏期インターンシップ実施報告……29
インターンシップ参加報告……29
2015年度秋季大学教授会研修会報告……30
2015年度大学職員 SD 研修会……31
岡田山祭～up to you～……32
大学クローバー賞表彰式……32
2015年度「めぐみ会賞」……33
私の研究……34
ゼミ紹介……35
課外活動紹介……36
中高部報告
数学甲子園報告……37
国際哲学オリンピック in エストニア……37
高等学部校内大会……38
中学部校内大会……38
釜ヶ崎訪問報告……39
長島訪問へ行って……39
夏の修養会　広島訪問報告……40
リーダーシップトレーニングキャンプ……40
訪米語学研修旅行を終えて……41
夏山登山……42
2015年度中高部受け入れ留学生……42
中高部　教職員研修会……43
2015年度文化祭“Shangri-La”……44
芸術鑑賞会……45
Ｊ１秋の遠足……45
Ｊ２秋の遠足……46
Ｊ３小旅行……46
Ｓ１一泊研修（近江八幡）……47
Ｓ２修学旅行報告……47
Ｓ３秋の遠足……48
校内読書感想文コンクールについて……48
中高部 キャンパス見学会……50
「秋の子ども会」報告……50
課外活動紹介……51
学院日誌……52